山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第28集

梅野木前1遺跡発掘調査報告書

株式会社しまむら・山形市教育委員会

山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第 28 集

梅野木前 1 遺跡
発 掘 調 査 報 告 書

― FM山形嶋店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査―

２００７

株式会社しまむら
山形市教育委員会

梅野木前（うめのきまえ）１遺跡
発掘調査報告書

―FM山形嶋店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査―

平　成 19 年 7 月

株式会社しまむら
山形市教育委員会

序

本報告書は、平成18年度に実施した「梅野木前１遺跡」の緊急発掘調査成果をまとめたものです。この遺跡は平成３年度に新たに確認されました。

遺跡の所在する山形市島地区は、良好な水田地帯の広がる地域でしたが、現在は山形市嶋土地区画整理組合により、大規模土地区画整理事業が進められております。区画整理事業地内には、本遺跡の他、梅野木前２遺跡・河原田遺跡・今塚遺跡・史跡「嶋遺跡」など多くの遺跡が所在しており、今回の調査は、梅野木前１遺跡範囲内における大型店舗建設工事に先立ち実施されたものです。

発掘調査の結果、奈良～平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構が検出されました。さらに「木簡」や「墨書土器」など当時の生活を鮮やかに伝える、貴重な文字資料などの遺物を得ることができました。

現在山形市内には名勝史跡「山寺」・史跡「山形城跡」をはじめ、約380箇所の遺跡が確認されております。近年は市内において様々な開発事業が進められており、埋蔵文化財保護を目的とする調整の結果、発掘調査に至る事例が増加しています。

本市教育委員会では、今後とも、開発事業との調整を図りながら埋蔵文化財の保護を一層進めてまいります。

本書が山形市における埋蔵文化財の保護啓蒙のために、また市民の皆様の地域史への理解を深める一助としてご活用いただければ、誠に幸いであります。

最後になりましたが、調査にあたり埋蔵文化財の保護に特段のご理解とご協力をいただきました地元の方々をはじめ、株式会社しまむら、山形市嶋地区土地区画整理組合、発掘調査に携わった作業員の皆様並びに関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成19年7月

山形市教育委員会
教育長　大場　登

例　言

1　本書はＦＭ山形嶋店新築工事に係る「梅野木前１遺跡」平成 18 年度発掘調査の報告書である。

2　緊急発掘調査は株式会社　しまむらの依頼をうけ、山形市教育委員会社会教育課が担当した。

3　調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名　梅野木前１遺跡（うめのきまえいちいせき）

遺 跡 番 号　平成３年度登録

所　在　地　山形県山形市梅野木前地内

現 地 調 査　平成18年10月26日～平成18年12月28日

整 理 作 業　平成19年１月10日～７月31日

調 査 主 体　株式会社　しまむら

調査実施機関　山形市教育委員会

（調査体制）

平成18年度	社会教育課		平成19年度	社会教育課	
課長	伊藤　邦男		課長	齋藤　悟	
課長補佐	冨木　慶太郎		課長補佐	冨木　慶太郎	
文化財保護係長	小野　徹		主任	須藤　英之	
主任	齋藤　仁		主任	國井　修	
主任	須藤　英之		臨時職員	安達　未奈	
主事	國井　修				
臨時職員	樋口　有美				
臨時職員	安達　未奈				

4　発掘調査から本書の作成にいたるまで、以下の方々及び機関からご教示・ご協力を頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

（財）山形県埋蔵文化財センター　嶋土地区画整理組合

伊藤邦弘　伊藤武士　小野忍　垣内恒次郎　北野博司　澤谷敬　島田祐悦　島原弘征　髙桑登　髙橋拓　高橋学　長瀬えみ子　福島正和　古川一明　三上喜孝　荒木志伸　八重樫忠郎　山口博之　吉田歓

5　本書の執筆は、須藤英之が担当した。編集は須藤が担当し、安達未奈がこれを補佐した。出土した木簡（２）の同定及び釈読については山形大学人文学部准教授　三上　喜孝氏に玉稿を頂き、附章として掲載した。

6　発掘調査及び整理作業にあたり、以下の方々からご協力頂いた。記して感謝申し上げる（敬称略）。

石垣勝幸　伊藤桂子　大貫文義　小川定雄　栗原清子　栗原武夫　笹利幸　三部秋夫　志田英信　堤操　富沢啓広　長岡伸恭　深瀬美貴子（現場調査）

芦名久子　伊藤桂子　深瀬美貴子（出土遺物整理）

7　出土遺物・調査記録類・調査に係る資料は、山形市教育委員会社会教育課が一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下の通りである。

ＳＢ…掘立柱建物跡　ＳＩ…竪穴住居跡　ＳＤ…溝跡　ＳＫ…土坑　ＳＰ…柱穴・ピット

ＳＧ…自然河川　ＳＸ…性格不明遺構　Ｓ…礫　Ｐ…土器　Ｗ…木・柱根

2　遺構番号は、現地調査段階での番号を報告書においても踏襲した。

3　遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は全て真北を示す。高さは海抜高で記載した。
遺構平面図に付した座標値は、平面直角座標系第Ｘ系（世界測地系）に拠る。単位はｍである。

4　調査区グリッドの南北軸は任意の設定としたため、南北軸線方向はＮ－21°－Ｅを図る。

5　基準杭の設定並びに空中写真撮影及び図化は株式会社パスコに委託した。

6　遺構実測図は原則として１/40の縮図で採録し、各々スケールを付した。

7　遺物実測図・拓影図は、全て１/３の縮図で採録し、各々スケールを付した。

8　遺構実測図中の水糸レベルは標高を表す。単位はｍである。

9　土層観察においては、各調査区の基本層序についてはローマ数字を、各遺構覆土の層位についてはアラビア数字で表した。

10　遺物実測図の内、断面黒ベタは須恵器を示し、断面黒60％は赤焼土器を示す。
その他の遺物は断面白抜きとした。アミ伏せの範囲は内面黒色処理もしくはスス付着範囲を示す。

11　遺構実測図中、アミ伏せ箇所は焼土範囲を示す。

12　遺構観察表中において、単位は㎝を使用している。

13　遺物観察表中において、（　）内数値は図上復元による推計値を、－は計測不能を示す。単位は㎝を使用している。

14　遺構・遺物番号は本文・表・挿図・写真図版とも一致させている。

15　基本層序及び遺構覆土の色調記載については、『新版標準土色帳』（小山・竹原：1997）に依った。

16　本書で使用した地形図等は以下の通りである。

第１図　山形市発行１:2,500国土基本図　Ｘ－QC　38－４（山形広域都市計画図「江俣」）を１:2,000に拡大。

第２図　山形県1982『土地基本分類調査　山形』「地形分類図」を基に作成。

第３図　国土地理院発行１：25,000『山形北部』

第４図　大日本帝國陸地測量部発行１：25,000地形図『山形北部』

第５図　山形市1956『山形市三千分一都市計画図其一』を１：10,000に縮小。

17　遺物注記は、過年度調査区との混同を避けるため「2006ウメノキマエ１」と標記し、（グリッド）（遺構番号）（層位）（取上時遺物番号）（掲載番号）の順に併記した。

目　次

Ⅰ　調査の経緯……1
　1　調査に至る経過……1
　2　調査の方法と経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
　1　地理的環境……3
　2　歴史的環境……3
Ⅲ　検出した遺構と遺物……8
　1　遺跡の層序……8
　2　遺構と遺物の分布……8
　3　検出された遺構と遺物……14
Ⅳ　考察……64
参考文献……66
附章　山形市梅野木前１遺跡出土木簡……69
報告書抄録……70

表

表１　梅野木前１遺跡土層注記……57
表２　梅野木前１遺跡柱穴観察表……60
表３　梅野木前１遺跡出土遺物観察表……61

挿　図

第１図　調査区概要図……2
第２図　地形分類図……4
第３図　遺跡位置図……5
第４図　昭和９年遺跡位置図……6
第５図　昭和31年段階の遺跡位置図……7
第６図　基本層序セクション配置図……9
第７図　南北軸基本層序……10
第８図　東西軸基本層序……11
第９図　各調査区南北軸基本層序……12
第10図　E-18～21･G-18～21基本層序……13
第11図　遺構配置図……15･16
第12図　SI37　平面図･断面図……18
第13図　SI37　出土遺物……19
第14図　SI80　平面図･断面図･出土遺物……20
第15図　SI168　平面図･断面図……21
第16図　SI168　出土遺物……22
第17図　SB169･SB170　平面図……23･24
第18図　SB169･SB170　ピット群断面図･出土遺物……25
第19図　I-18～20グリッド遺構群　平面図……27･28
第20図　I-18～20グリッド　各遺構断面図……29
第21図　I-18～20グリッド　各遺構出土遺物……30
第22図　I-18～20グリッド　各遺構出土遺物(２)……31
第23図　G-７グリッド遺構群　平面図･断面図……33
第24図　SP116･SD96･SP94･SD81　出土遺物……34
第25図　D-13～14グリッド遺構群　平面図･断面図･出土遺物……35
第26図　H～I-９ピット群平面図･断面図……36
第27図　H-10ピット群平面図･断面図……37
第28図　遺構出土柱根……38
第29図　F～G-16グリッド遺構群　平面図･断面図……39
第30図　I-22～25グリッド　平面図･断面図……40
第31図　SD１･SD125･SP２･SP３･SP４　平面図･断面図…41･42
第32図　SD１･SD125･SP109　出土遺物……43
第33図　SK38･SD36･SD39　平面図･断面図……44
第34図　SG41　平面図・断面図……45･46
第35図　SG41　出土遺物（１）……47
第36図　SG41　出土遺物（２）……48
第37図　Ⅵ層・Ⅴb層・Ⅴc層・Ⅳ層・Ⅱ層　出土……50
第38図　Ⅴ層　出土遺物(１)……51
第39図　Ⅴ層　出土遺物(２)……52
第40図　Ⅴ層　出土遺物(３)……53
第41図　Ⅴ層　出土遺物(４)……54
第42図　Ⅴ層　出土遺物(５)……55
第43図　Ⅴ層　出土遺物(６)……56

図　版

図版１　調査区遠景／Ⅰ－19出土平瓶
図版２　調査区全体／ＳＢ169・ＳＢ170俯瞰
図版３　SB171付近俯瞰　他
図版４　SI37精査状況　他
図版５　SI80セクション/SI80完掘状況
図版６　Ⅰ-17グリッドⅤ層精査後状況　他
図版７　Ｇ－６～８グリッド遺構検出状況
図版８　SP８セクション　他
図版９　SP12セクション　他
図版10　SP21セクション　他
図版11　SP34･SD35･SD16セクション　他
図版12　SP28セクション　他
図版13　SP17断ち割り　他
図版14　Ⅰ-13～15グリッド検出状況
図版15　SP４セクション　他
図版16　I･J-18グリッド北壁基本層序　他
図版17　SD145･SD113セクション　他
図版18　SP127セクション　他
図版19　I-12～14グリッド西壁セクション　他
図版20　出土遺物(１)
図版21　出土遺物(２)
図版22　出土遺物(３)
図版23　出土遺物(４)
図版24　出土遺物(５)
図版25　出土遺物(６)
図版26　出土遺物(７)
図版27　出土遺物(８)
図版28　出土遺物(９)
図版29　出土遺物(10)
図版30　出土遺物(11)
図版31　出土遺物(12)
図版32　出土遺物(13)

Ⅰ　調査の経緯

１ 調査に至る経過

梅野木前１遺跡は山形市北西部の梅野木前地区に所在する。平成３年度に、島地区及び今塚地区において、市街化区域編入と区画整理事業による宅地開発が計画されたことを受け、山形県教育委員会で実施した表面踏査により、奈良～平安時代の遺跡として新規登録がなされた（山形県教育委員会　1992)。

山形市教育委員会では土地区画整理事業の進展に先立ち、平成 15 年度に梅野木前１遺跡範囲東側について試掘・確認調査を実施した結果、遺構・遺物の分布がさらに東に伸びることが分かり、遺跡範囲の変更を県教育委員会に報告している。ただし、従来の遺跡範囲より東に伸びる部分については、古墳時代の文化層は確認されず、奈良・平安時代の時期の集落のみ広がるものと考えられた。

平成 17 年度、山形市による市道嶋西廻り線道路改良事業の実施に際し、山形市教育委員会では、当該事業実施の範囲内において緊急発掘調査を行った。本次調査区の西側隣接部分にあたる。

本次調査の事業区域においては、当初は本調査の対象とならない施工内容で事業を実施する様、事業者との間で調整を図っていた。確認のため平成 18 年８月 31 日～９月２日に、事業者側借上の重機による立会調査を実施したところ、いずれの基礎掘削予定箇所でも工事掘削深度が遺跡の文化層に到達し、遺跡保護層が確保されないことが確認された。そのため急遽担当者間で協議を行い、本調査実施の方向で調整が行われた。平成 18 年 10 月 26 日付で株式会社しまむらと山形市教育委員会の間で協定を締結し、発掘調査の実施を合意した。

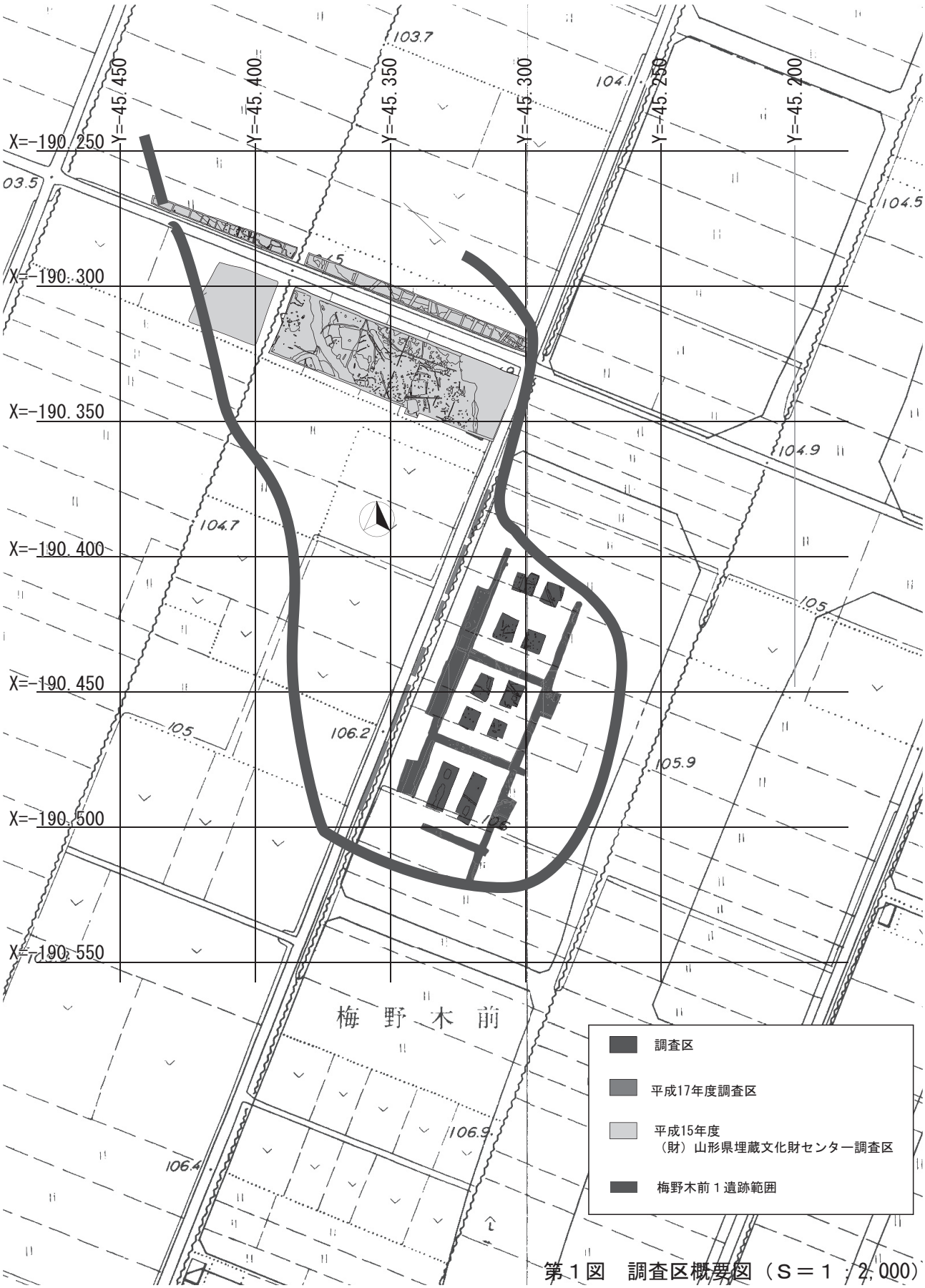
発掘調査は、株式会社しまむらの依頼により、当市教育委員会が実施したものである。調査の期間は平成 18 年 10 月 26 日から 12 月 28 日の延べ 44 日間の期間で実施した。

２ 調査の方法と経過

事業実施範囲についての発掘調査は、平成 18 年 10 月 26 日～ 12 月 28 日までの延べ、44 日間実施した。調査面積は約 2,203 ㎡である。

調査区を覆う座標は、調査区の南北軸線に合わせて配置した。南北をＹ軸の基準とし、それと直交する線をＸ軸とした。これを起点として５ｍ四方の方眼（グリッド）を設定した。Ｙ軸は北から南に１～ 25 まで、Ｘ軸は西から東にＡ～Ｊまで番号を設定し、「Ｂ－５」のように標記した。方眼のＹ軸軸線は、真北方向に対してＮ－ 21°－Ｗを図る。

以下、梅野木前１遺跡の平成 18 年度調査における現地調査工程の概略を記す。10 月 26 日に調査区の設定、及び重機掘削による表土除去作業に入った。10 月 29 日に休憩所・仮設トイレの設置、発掘器材搬入・環境整備を行う。11 月６日から人力による遺構面精査を開始した。その後、遺構検出に並行して検出状況の写真撮影・遺構登録・精査を行った。遺構精査については、土層観察のために、各遺構の平面図や断面図の作成、遺物の検出および登録、写真撮影、土層注記などの記録作業、遺物取り上げなどを実施した。12 月 26 日に遺構精査・測量記録を終了、同日より器材を撤収し始め、28 日に現地における調査を終了した。本報告書以前に実施された平成 17 年度の山形市による緊急発掘調査（植松 2006)、平成 15 ～ 16 年度に（財）山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した都市計画道天童鮨洗線敷設に伴う緊急発掘調査（伊藤 2007）については既に報告書が刊行されている。



第１図　調査区概要図（Ｓ＝１：2,000）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　地理的環境

山形市は、山形県東部に形成される山形盆地の南東部に位置する。東側には宮城県との県境となる奥羽山脈が連なり、市域の南部と西部には白鷹丘陵が裾野を広げている。奥羽山脈に源を発する馬見ヶ崎川が市内を北流し、南東から北西に伸びる扇状地を形成し、その中に山形市街域は形成されている。その他にも、周囲の山々から流れ出す大小の河川が小規模な扇状地をつくり、複合扇状地の様相を呈している。

梅野木前１遺跡（平成３年度登録）は山形市の北西部、ＪＲ山形駅から北西 4.3㎞、山形市大字梅野木前地内（嶋土地区画整理事業地内 24 街区）に所在する。調査前の地目は水田・畑地として利用されていた。

馬見ヶ崎川によって形成された扇状地上に立地した山形市街地は、東の奥羽山脈から村山盆地南半西側を北流する須川に向かって緩やかに傾斜し低くなってゆく地形となっている。

本遺跡は馬見ヶ崎川と須川に挟まれた低湿地内の自然堤防上に立地する。調査対象地の平均標高は約 105 ｍを測る。調査区の東側は扇状地扇端部、西側は扇状地下を伏流する小河川によって形成される沖積平野と、その間に自然堤防が絡み合うような地形様相を呈している。

２　歴史的環境

山形市内では現在約 380 箇所の遺跡が確認されている。近年の山形市内においては、各地域で土地区画整理事業等をはじめとする開発事業の進展に伴い、埋蔵文化財と開発行為との調整が増加している。

梅野木前１遺跡の所在する山形市江俣地区付近には、第３図のように弥生時代中期の河原田遺跡、江俣遺跡、古墳時代前期と平安時代の複合遺跡である今塚遺跡が存在する。本次調査区の北西隣接部分、（財）山形県埋蔵文化財センターによる平成 16 年度梅野木前１遺跡調査区からは、古墳時代前期の水田跡、古墳時代前期の竪穴住居跡を主体とする集落が確認されている。

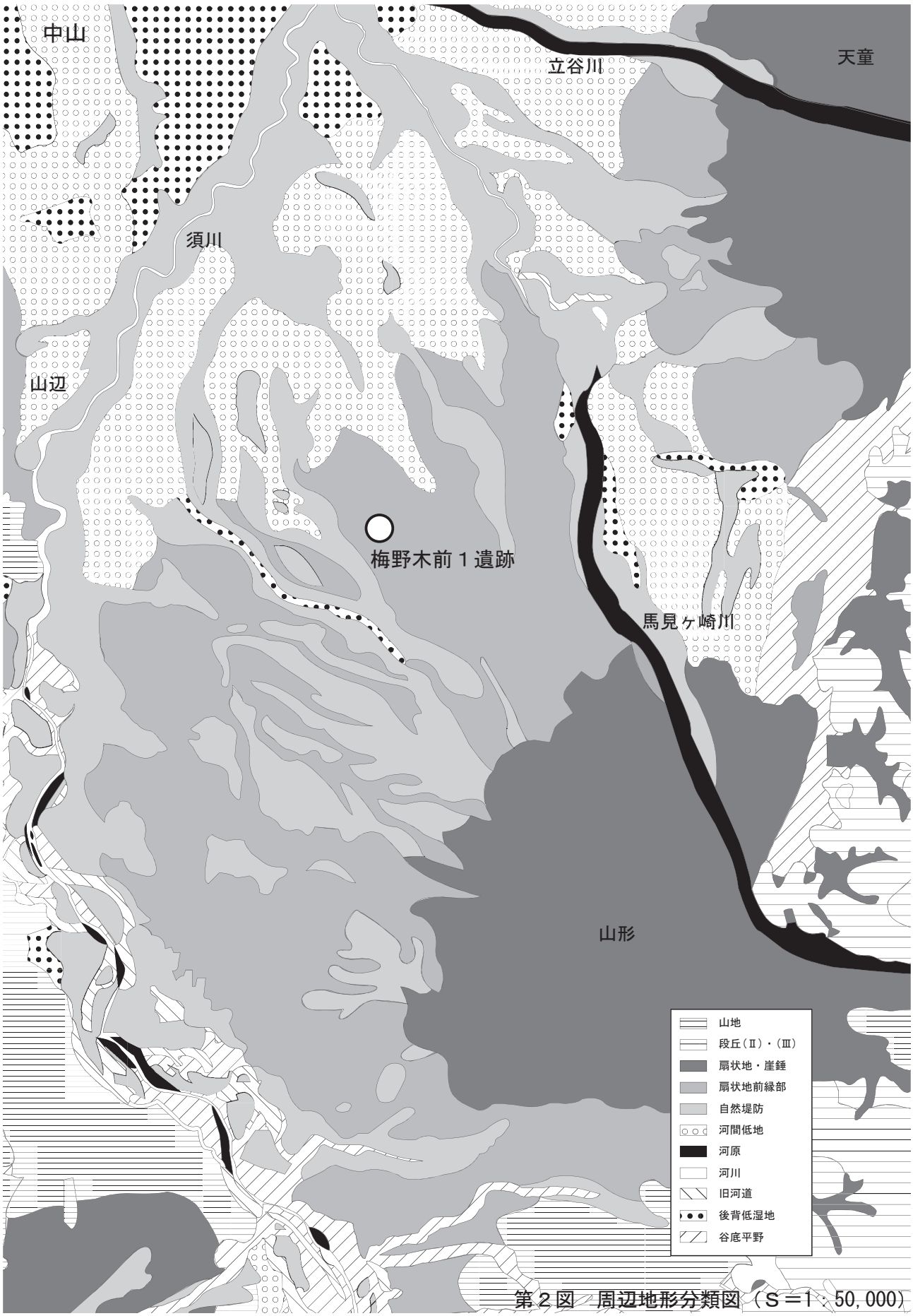
古墳時代中期では長表遺跡、後期の集落は国指定史跡嶋遺跡が所在する。墳丘としては志戸田地区に去手呂古墳群が所在する。

梅野木前１遺跡本次調査区の主たる時期にあたる奈良～平安時代を主体時期とする遺跡では、今塚遺跡・河原田遺跡・梅野木前２遺跡、行才遺跡などが周囲に所在する。

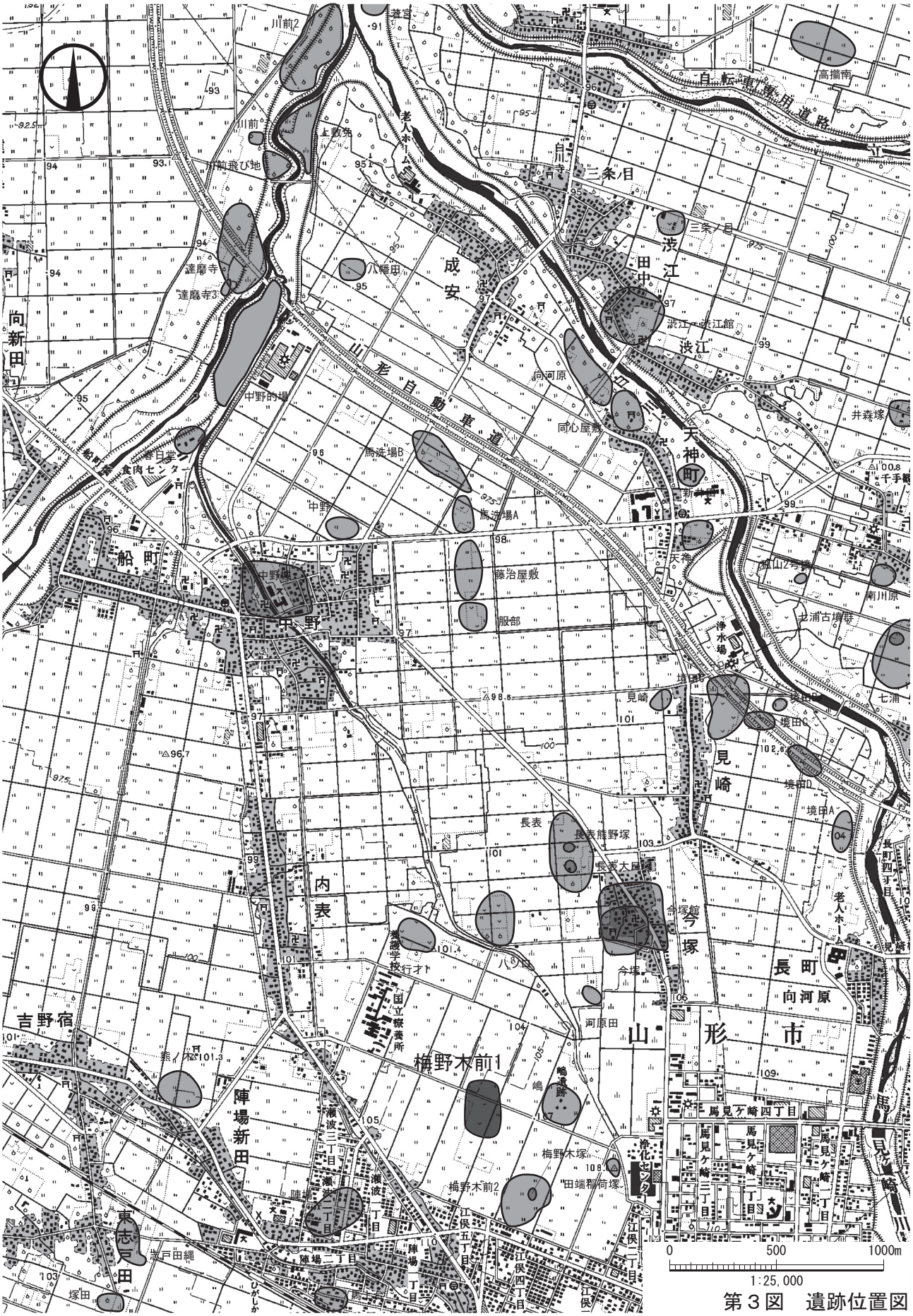
これらの事から、弥生時代中期頃から人々は金井・大郷地区内の自然堤防としての微高地に集落を営み、そして古墳時代・奈良～平安時代に至る時期にも当地において集落が形成され、生業活動が行われ続けたものと考えられる。現在の山形市金井地区は、古代の郡郷制によれば「那珂郷」に含まれていた説（角川日本地名大辞典編纂委員会 1981）が提唱されていたが、平成 11 年度に（財）山形県埋蔵文化財センターにより発掘調査された志戸田縄遺跡から「福有南」と墨書された土器が出土したため、別の郷名「福有郷」案も想定されている。

この時期の集落の一端を成したのが梅野木前１遺跡であり、古代出羽国最上郡内の集落の一部であったものと推定される。山形市街地の西側、須川周辺の自然堤防には多くの奈良～平安時代遺跡が確認される。また、山形市内南端の中位段丘地に展開する山形市小松原地区や上山市久保手地区、あるいは山形市の北西に位置する寒河江市平野山窯跡群では、当時の須恵器大生産地帯であった事を物語るように、窯跡遺跡が数多く発見されている。これら生産遺跡についても近年発掘調査事例が蓄積されており、山形市内消費地遺跡との供給関係など、関連性については課題となっている。

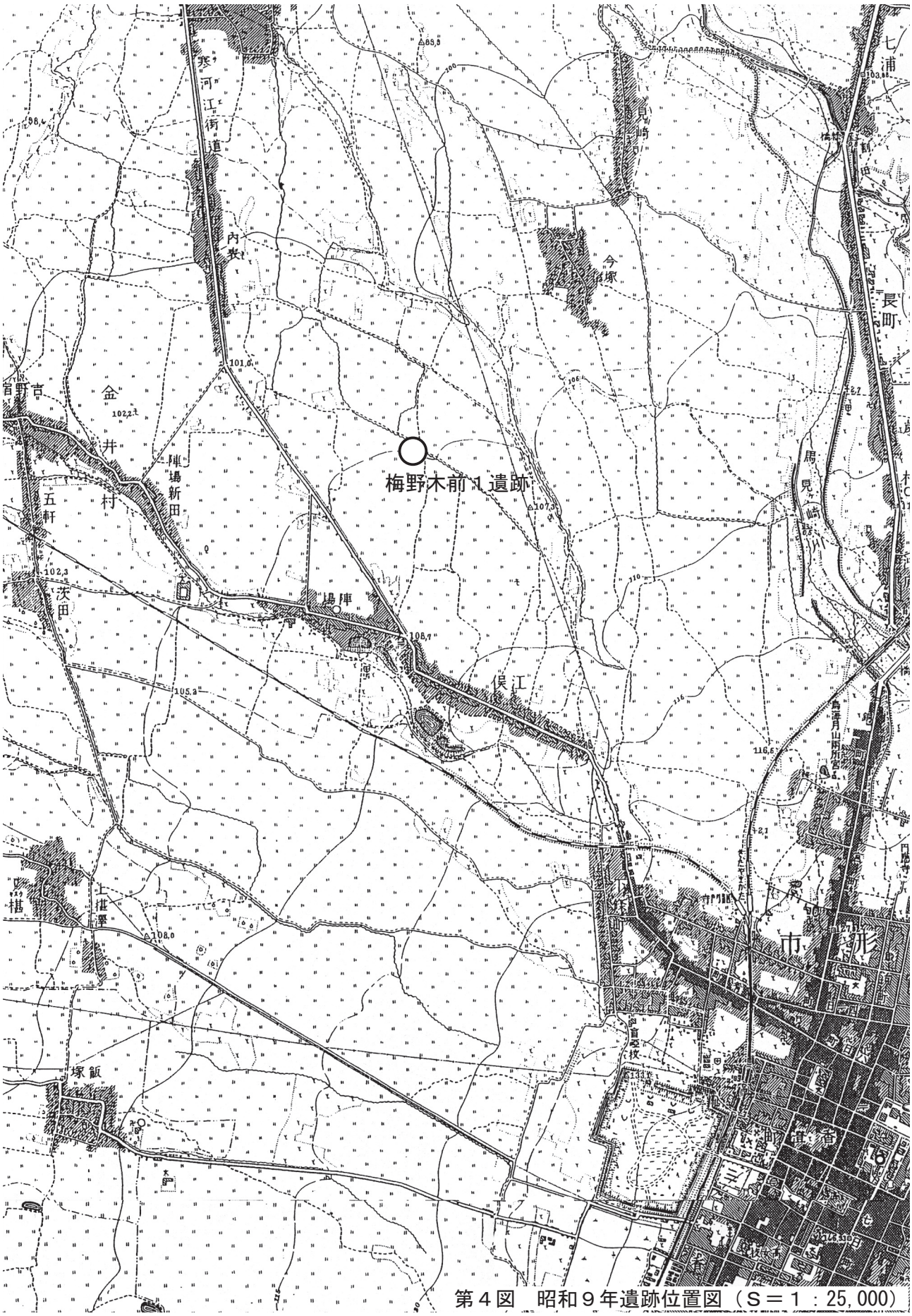
中世に至り、現在の山形市街地の範囲は「大山荘」の範囲内に推定され（山形県 1982）、長表遺跡、志戸田縄遺跡などが当該期の遺跡として確認されている。この頃の集落遺跡としては志戸田縄遺跡、平地居館としては長表遺跡や今塚館などが築かれた。戦国時代に至り中野城等の平地居館と合わせ、長谷堂城・成沢城・平清水館・山家楯などの山城が山形盆地周囲の丘陵地に築かれたものと推定される。



第２図　周辺地形分類図（Ｓ＝１：50,000）


自転車専用道路
高�南
川前2
川前
川前飛び地
上敷免
老人ホーム
三条ノ目
渋江
田中
成安
八幡田
達磨寺
向新田
山形自動車道
中野的場
同心屋敷
天神町
馬洗場B
馬洗場A
中野
船町
中野
藤治屋敷
服部
見崎
境田
長表
長表熊野塚
長表大屋敷
内表
今塚館
今塚
長町
向河原
河原田
山形市
吉野宿
梅野木前1
陣場新田
梅野木塚
梅野木前2
馬見ケ崎四丁目
馬見ケ崎三丁目
馬見ケ崎一丁目
馬見ケ崎二丁目
浄化センター
東志田
0
500
1000m
1:25,000

第３図　遺跡位置図



第４図　昭和９年遺跡位置図（Ｓ＝１：25,000）

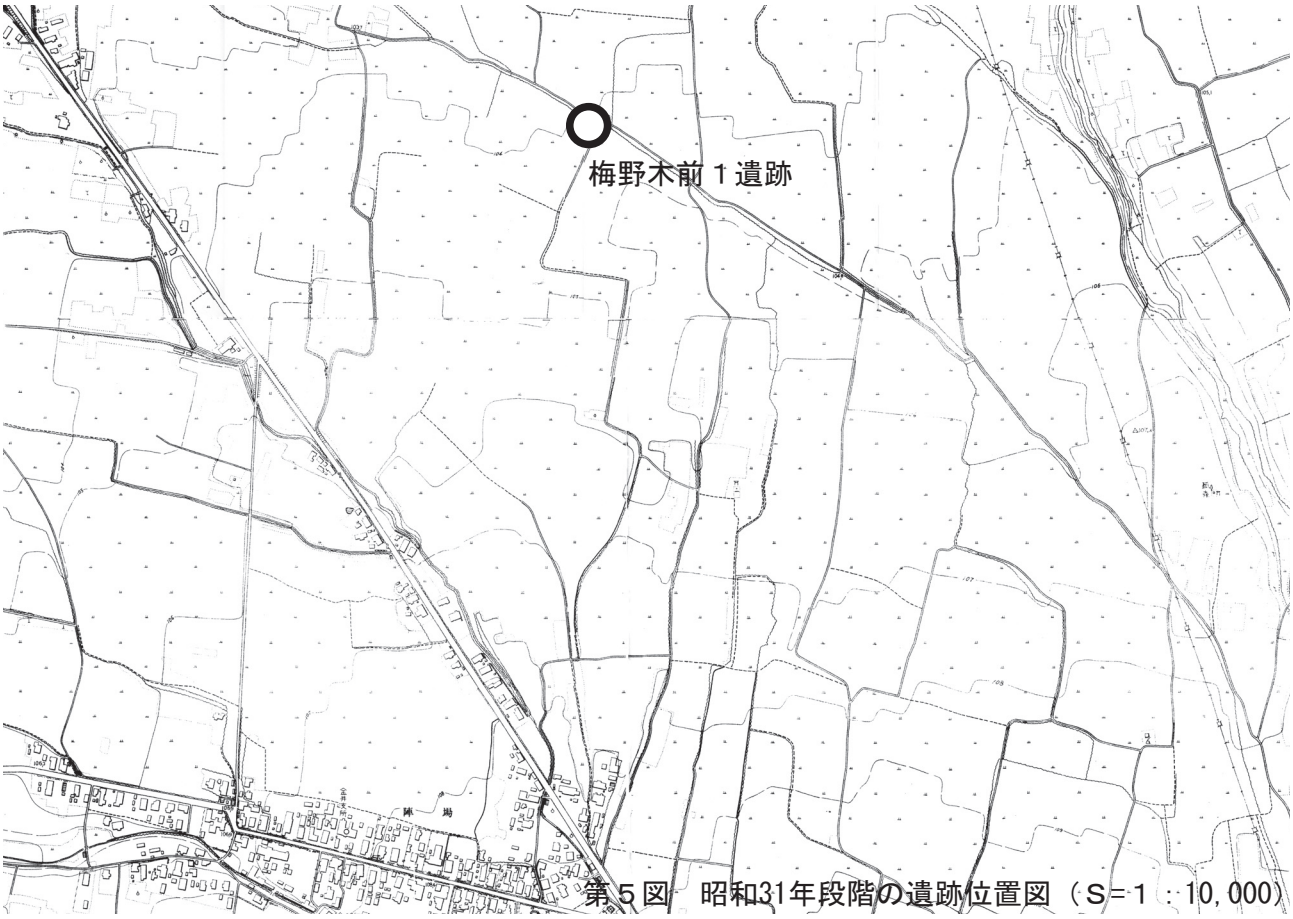
近世になると山形城が築かれ、現在の山形市街地の基礎となる都市計画が開始された。現在の霞城公園にあたる山形城跡の本丸と二の丸を中心とする区域、並びに十日町一丁目地内に現存する三の丸堀跡及び土塁の残存区域については史跡として国指定を受け、現在整備が進められている。

同時期に、山形城下の耕作地帯の整備が開始されたと考えられる。現在の馬見ヶ崎川は、近世初期の寛政年間に、当時の山形城主・鳥居忠政による河川改修が行われ、盃山付近で北に大きく流路改変が成されたと伝えられる（山形市 1973）。それ以前は、現在の流路より南寄りを流れ、小白川町付近から旧県庁（重要文化財「山形県旧県庁舎（文翔館）」）付近を通って西へ流れていたと推定される。

その馬見ヶ崎川の河道末端を利用して山形五堰が開発された。山形五堰は、山形市内西部に展開する農村集落の水田地帯における農業用水供給を目的として、当時の山形城主・鳥居忠政による寛永元（1624）年以降の馬見ヶ崎川改修事業以降、継続して整備されたものと推定される（山形市 1973）。その内の一つ、八ヶ郷堰は山形市内の北西部に向かって流れ、江俣・陣場・陣場新田・鮨洗・志戸田・吉野宿・中野・船町の８地区に流れ込む事から「八ヶ郷堰」の名称が付けられた、と推定されている。陣場地区付近では、陣馬沼などのため池が、河道の名残として昭和 40 年代まで残存していた（金井の歴史刊行会　2005）。

その後、金井地区は山形市内における耕作地帯として開発が進められたものと推定される。馬見ヶ崎川扇状地を経由しての山形市内西側に注がれる山形五堰の一基、八ヶ郷堰を主たる水源として水田耕作が経営されてきた。
近代に至り、明治２年（1869）に廃藩置県が実施され、新制「山形県」が明治４年（1871）７月の廃藩令により置かれることとなった。この後の明治 22 年（1889）に、新制の金井村が成立した。

近年に至り、昭和 30 年代以降に耕地整理事業が実施、江俣地区や馬上台地区等で土地区画整理事業が実施、現在は先述のように嶋土地区画整理事業が進められ、宅地及び商業用地としての開発が進められている。



第５図　昭和31年段階の遺跡位置図（S=1：10,000）

Ⅲ　検出された遺構と遺物

１ 調査区と層序

梅野木前遺跡は南北約 200m、東西約 180m の範囲に広がる。地目は水田・畑となっており、標高は北端で約 105m、南端で約 106m を測る。馬見ヶ崎川扇状地前縁部（山形県 1982）内の微高地に立地する。

調査区当該区域周辺については、昭和 30 年代以降、大規模な耕地整理が実施された。さらに平成 17 年度には、水田耕作を中止した現地表の上層に、厚さ 60 ㎝の盛り土が、嶋土地区画整理組合により施工されている。

今回の発掘調査区は、遺跡の範囲に南北に長く広がる形で、建物の基礎掘削予定箇所に合わせてトレンチを配置する形となった（第 11 図）。調査区を覆うグリッドは、地形に合わせて配置し、５m を最小単位とするグリッドの設定を行った（第６図）。

基本堆積土層の観察は調査区の全体で行った。その結果、基本的な堆積は各地点において概ね同様であった。詳細は各調査区の土層セクションを参照されたい（第６～ 10 図）。

Ⅰ層は、平成 17 年度に嶋土地区画整理組合により実施された盛り土層である。

Ⅱ層は、Ⅰ層造成直前までの水田耕作土層・及び畑土である。

Ⅲ層は、数年前まで耕作を実施していた水田基盤層である。

Ⅳ層は、Ⅲ層以前の耕作土層である。暗褐色細砂層である。遺物が多く含まれる。

Ⅴ層は、河川の堆積作用による黒色シルト層である。

Ⅴｂ層は、Ⅴ層下層に検出される黄褐色粘質シルト層である。未分解のヨシ等の植物質を多量に含む。

Ⅴｃ層は、Ⅴ層の下層に検出される灰褐色細砂層である。未分解の植物質を微量に含み、Ⅴｂ層ほどの広がりではないが、Ⅰ -17 ～ 21 グリッド周辺にかけて５～ 10㎝ 程度の厚さで堆積する状況が窺えた。

Ⅵ層は黄褐色粗砂層であり、梅野木前１遺跡の遺構確認面、奈良～平安時代の地山層として判断した。

なお、奈良～平安時代の遺構確認面下層について、部分的掘り下げを実施し、地山層のⅥ層以下 20 ～ 60 ㎝下に、未分解植物質を大量に含む腐植土層が確認されたが、古墳時代の文化層は検出されなかった。

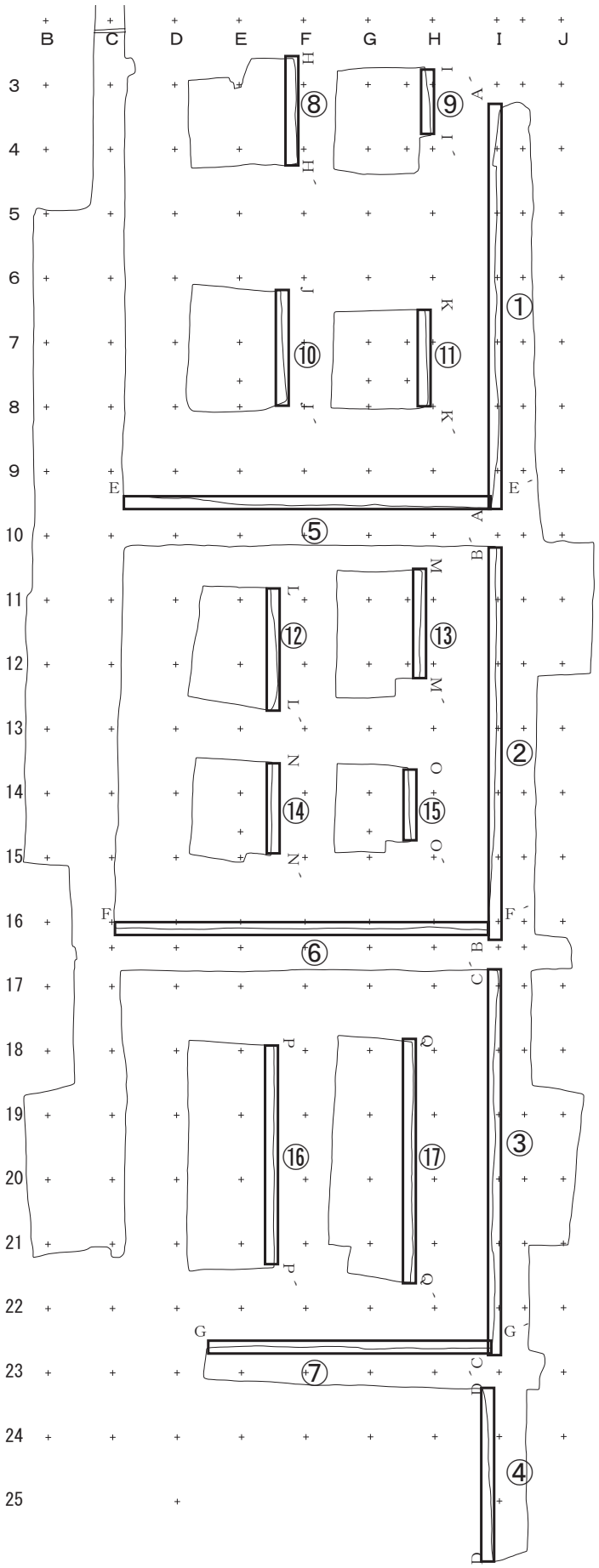
２ 遺構と遺物の分布

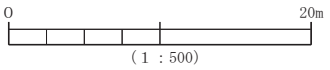
調査区では奈良～平安時代の土坑群や竪穴住居跡、溝跡や柱穴群を中心として多数の遺構・遺物が確認された。遺構と遺物の分布は調査区中央から東側に特に集中して検出されたが、全体的には近年までの水田基盤層の下層の包含層中に遺物が多く確認された。

本次調査の前年度に、西側隣接部分で市道拡幅に伴う発掘調査を実施しており、古代の遺構・遺物群が検出されている（植松 2006）。また、北西隣接部分では、平成 15 ～ 16 年度に財団法人山形県埋蔵文化財センターによる発掘調査が実施され、奈良～平安時代の文化層のさらに下層に、古墳時代前期の水田跡及び集落跡が確認された。
本次調査区でも、下層に古墳時代の文化層の有無が懸念されたが、前述の通り深掘りをした結果、確認されなかった。また、古墳時代の混入と考えられる遺物もほとんど確認されなかった。

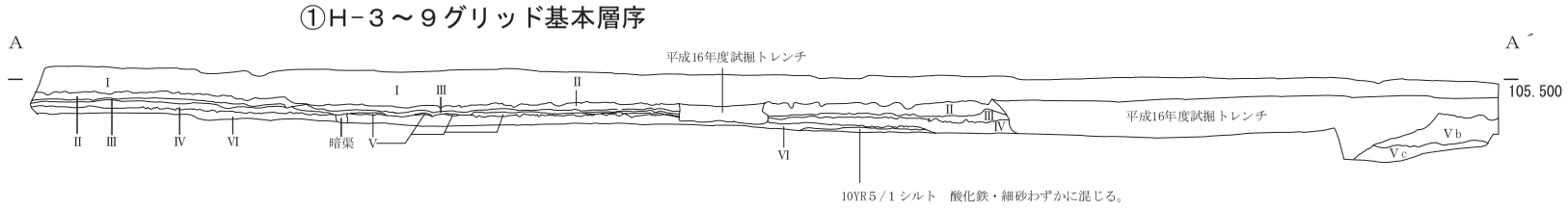
今回の調査においては、遺物は奈良～平安時代の古代の土師器・須恵器、施釉陶器・瓦、木簡などの木製品、近代の陶磁器や木製品が確認された。遺構覆土中から検出されたものに比して、二次的な堆積による上層の包含層中に含まれるものが大半を占める状況であった。
近代の地山層となるⅤ層、あるいは遺構検出面のⅥ層まで重機により表土を除去した後、下層の遺物包含層及び遺構を精査した。

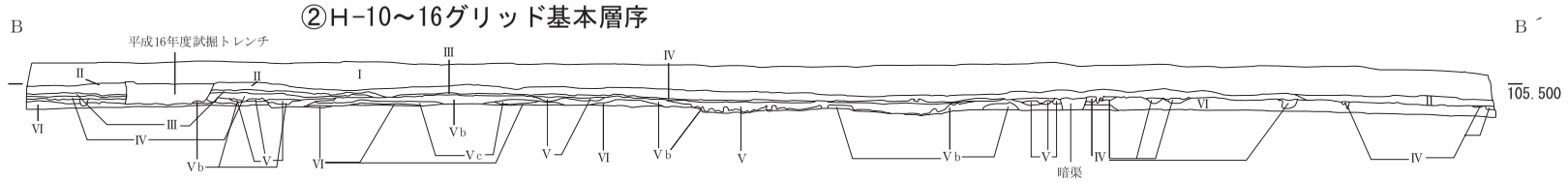
Ⅴ層、もしくは近似するＳＧ 41 覆土中からは、中世の 12 世紀後半まで降る時期の遺物が確認されたため、土砂堆積の下限は中世まで降るものと考えられるが、その他の稲杭痕跡等以外には新しい時期の遺物は確認されず、Ⅴ層下の検出遺構については奈良～平安時代の範疇に収まるものと判断される。

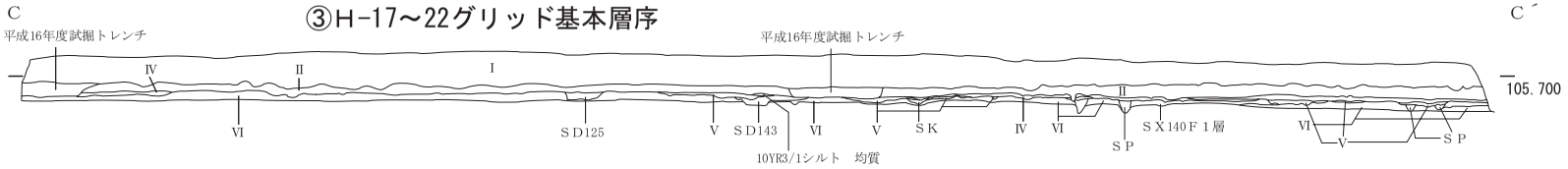


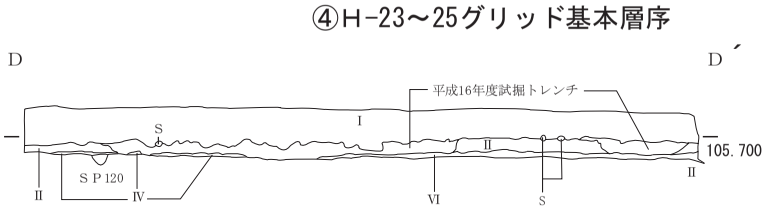


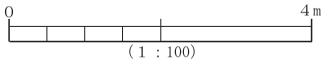
第６図　基本層序セクション配置図


①H-３～９グリッド基本層序
A
A´
平成16年度試掘トレンチ
105.500
I
II
III
IV
V
Vb
Vc
VI
暗渠
10YR５/１シルト　酸化鉄・細砂わずかに混じる。


②H-10～16グリッド基本層序
B
B´
平成16年度試掘トレンチ
105.500
I
II
III
IV
V
Vb
Vc
VI
暗渠

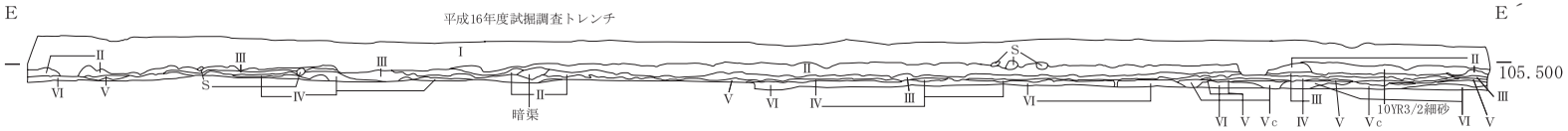

③H-17～22グリッド基本層序
C
C´
平成16年度試掘トレンチ
105.700
I
II
IV
V
VI
ＳＤ125
ＳＤ143
ＳＫ
ＳＰ
ＳＸ140Ｆ１層
10YR3/1シルト　均質


④H-23～25グリッド基本層序
D
D´
平成16年度試掘トレンチ
105.700
I
II
IV
VI
S
ＳＰ120

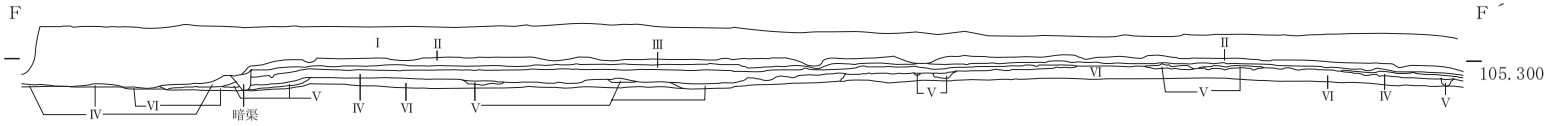

0
4m
（１：100）

第７図　南北軸基本層序

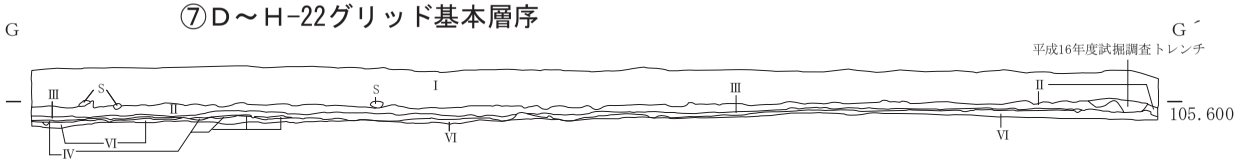
⑤C～H-９グリッド基本層序

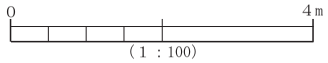


⑥C～H-16グリッド基本層序



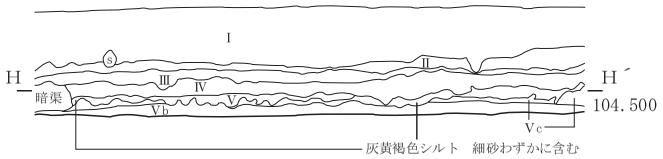
⑦D～H-22グリッド基本層序



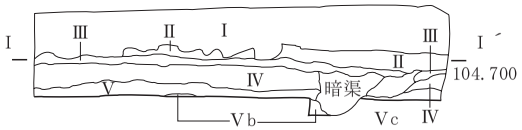


第８図　東西軸基本層序

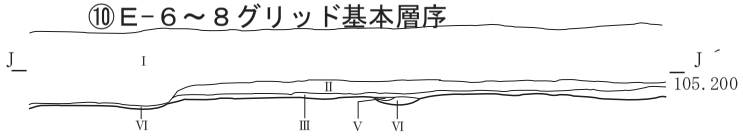
⑧E－２～４グリッド基本層序



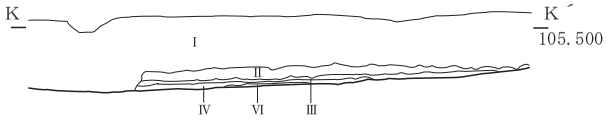
⑨H－２～４グリッド基本層序



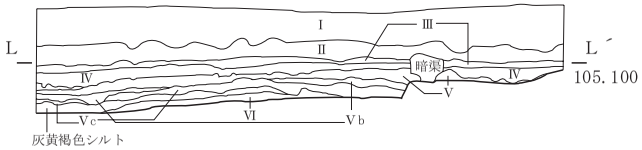
⑩E－６～８グリッド基本層序



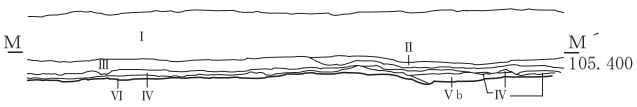
⑪G－６～８グリッド基本層序



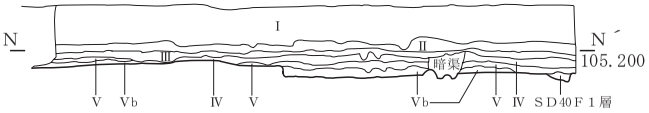
⑫E－10～12グリッド基本層序



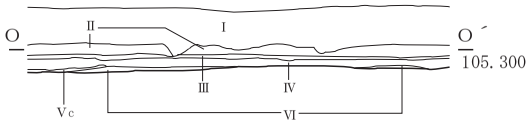
⑬G－10～12グリッド基本層序

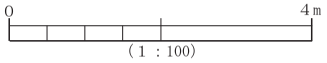


⑭E－13～15グリッド基本層序



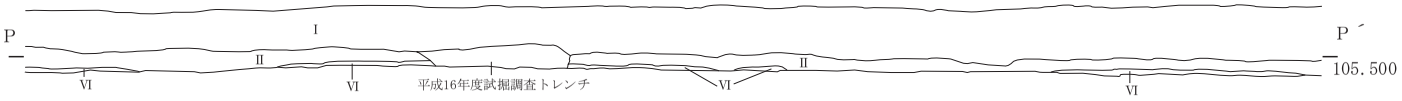
⑮G－13～15グリッド基本層序



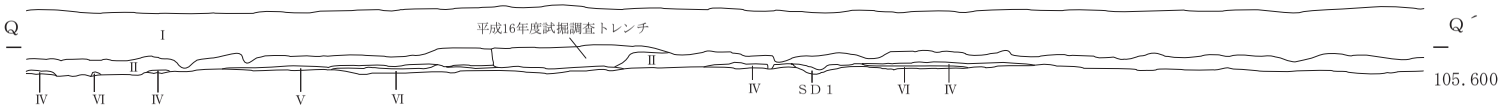


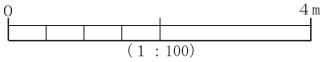
第９図　各調査区南北軸基本層序

⑯E-18～21グリッド基本層序



⑰G-18～21グリッド基本層序





第10図　E-18～21・G－18～21グリッド基本層序

３ 検出された遺構と遺物

１．竪穴住居跡

ＳＩ 37（第 12 図：図版４）

Ｆ－10 グリッドに所在。規模は東西軸３ｍ、検出面からの深さは 20 ㎝である。北半分は調査区外のため、未検出である。南北軸線はＮ－７°－Ｗを測る。ＳＤ 82 を切る。覆土は５層に分類された。平面の検出プランは不整の方形を成し、竪穴住居跡と推定されるが、カマドは確認されなかった。

須恵器坏（１）、木簡（２）、木簡状木製品（３）、磨石状石製品（４）、被熱礫（５～７）が出土している。木簡（２）の内容については附章の山形大学准教授　三上喜孝先生による解説を参照頂きたい。

（１）の形状から推定して、９世紀前半の年代が推定される。

ＳＩ 80（第 14 図：図版５）

Ｅ・Ｆ－９グリッドに所在。規模は東西軸 2.5 ｍ、検出面からの深さは 20 ㎝である。北半分は調査区外のため、未検出である。南北軸線はＮ－１°－Ｅを測る。遺構の切り合い･重複関係は確認されなかった。覆土は１層であった。平面の検出プランは不整の方形を成し、竪穴住居跡と推定されるが、カマドは確認されなかった。

墨書痕跡のある須恵器坏底部（８）、須恵器甕破片（９～ 12）が出土している。９は内面に火を受けた痕跡が確認され、11・12 は外面に擦痕が確認される。ＳＩ 37 と形状・堆積状況供に酷似する。出土遺物の須恵器甕から、９世紀前半の年代が推定される。

ＳＩ 168（ＳＸ 139・ＳＸ 140）（第 15 図：図版６）

Ｆ－10 グリッドに所在。規模は推定で南北 5.5 ｍ、ＳＸ 139 の検出面からの深さは 16 ㎝である。推定される建物の軸線は、Ｎ－３°－Ｅを測る。断面観察では、ＳＸ 139 をＳＸ 140 が切る層序関係にある。当初はＳＸ 139・ＳＸ 140 について、覆土中に多量の炭化物及び焼土が確認され、性格不明遺構として精査を行った。住居跡全体の形状及び範囲は推定になるが、ＳＩ 168 の床面として整地された遺構のＳＸ 139 及びＳＸ 140 と想定した。ＳＸ 139 から須恵器蓋（13・14）・坏（15・16）・甕（17）・土師器甕（19 ～ 23）・小型甕（24 ～ 25）、ＳＸ 140 から土師器小型甕（26）が出土した。

ＳＸ 139 は覆土中に炭化物や焼土を 10％含み、しまりは硬い。覆土は１層に分類された。ＳＸ 140 は覆土中に炭化物を 60％含み、しまりは弱い。覆土は１層に分類された。カマドは確認されなかったが、ＳＸ 139・ＳＸ 140 出土土師器甕には外面に煤が付着しているものが多く確認された。

ＳＸ 139 範囲を切るＳＤ 112 がＳＩ 168 の構成要素となるか、伴わずに後で掘削された溝となるかは不明である。東西両端は調査区の外になるため建物の全体の規模は確認できなかった。

２．掘立柱建物跡

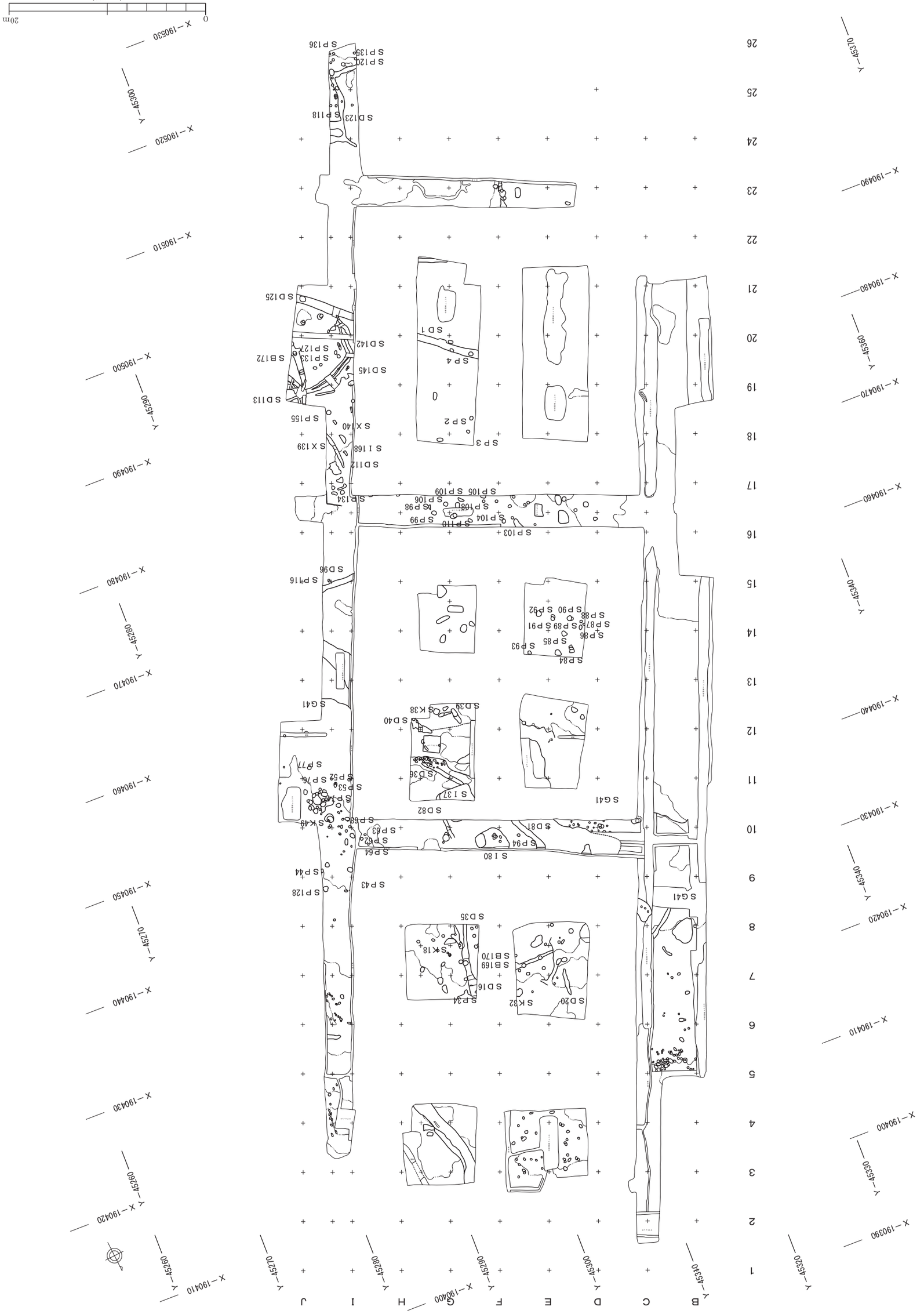
ＳＢ 169　（第 17 ～ 18 図：図版２・７～ 10）

Ｄ～Ｆ－７グリッドに所在。ＳＰ 21・ＳＰ 22・ＳＰ 23・ＳＰ 164・ＳＰ 11・ＳＰ 10・ＳＰ９・ＳＰ５・ＳＰ 25・ＳＰ 24 により構成される。桁行の推定長は約 40 ｍを、南北軸線方向はＮ－２°－Ｅを測る。いずれの柱穴からも、土師器や須恵器の小破片のみが検出された。図化していない。北東角に位置するＳＰ 164 はＳＤ 16 精査後に確認され、そのためＳＢ 169 はＳＤ 16 より後の年代が推定される。

ＳＢ 170（第 17 ～ 18 図：図版２・７～ 11）

Ｄ～Ｆ－７グリッドに所在。ＳＢ 169 と建物桁行の軸線方向を異にし、重なり合う様に検出された状況から判断して、建て替え等の理由による時間差があるものと考えられる。桁行は西辺を構成するピットが検出できず不明である。梁行は約 23 ｍ、南北の軸線方向はＮ－８°－Ｗを測る。

ＳＰ 26・ＳＰ 27・ＳＰ 34・ＳＰ 17・ＳＰ 19・ＳＰ９・ＳＰ６によって構成される。断面観察からは、ＳＤ 29・ＳＤ 16・ＳＤ 35 を切る層序関係が観察された。ＳＤ 35 がＳＢ 170 の雨落ち溝の地業として掘られた可能性もある。


B
C
D
E
F
G
H
I
J
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
SG41
SD82
SD81
SP94
SP64
SP63
SP62
SP53
SP52
SP76
SP77
SK49
SP66
SP43
SP128
SP44
SD35
SD16
SP34
SD20
SK82
SB169
SB170
SK18
SD40
SD36
SD30
SK38
SP84
SP85
SP93
SP86
SP87
SP89
SP91
SP88
SP90
SP92
SP116
SD96
SP103
SP110
SP104
SP99
SP108
SP98
SP106
SP105
SP109
SP134
SD112
SX139
SI168
SX140
SP155
SD113
SB172
SP133
SP127
SD142
SD145
SD125
SP3
SP2
SP4
SD1
SI80
SD123
SP118
SP120
SP135
SP136
SG41
SG41
X−190390
X−190400
X−190410
X−190420
X−190430
X−190440
X−190450
X−190460
X−190470
X−190480
X−190490
X−190500
X−190510
X−190520
X−190530
Y−45330
Y−45340
Y−45320
Y−45310
Y−45300
Y−45290
Y−45280
Y−45270
Y−45260
Y−45250
Y−45240
Y−45230
Y−45220
Y−45210
Y−45200
Y−45190
Y−45180
Y−45170
Y−45160
0
20m
(1：400)

第11図　遺構配置図

一方ＳＤ 20 とＳＤ 29 は一連の溝跡かと推定されるが、掘立柱建物跡の柱穴は北側には確認されず、この場合建物規模と合わなくなるため、溝跡と建物跡が伴わない可能性もある。遺物はＳＰ 17 から（27）、ＳＰ 34 から（28）がそれぞれ出土した。

ＳＢ 172 （第 19 図：図版 10）

Ｉ－ 18 ～ 19 グリッドに所在。ＳＤ 113・ＳＤ 115 他の溝跡によって囲まれる配置となる。整理作業時に確認した規模で、南北長は 20 ｍ・東西長は 18 ｍを測る。南北の軸線方向はＮ－２°－Ｗを測る。ＳＰ 138・ＳＰ 127・ＳＰ 141・ＳＰ 132・ＳＰ 132・ＳＰ 149・ＳＫ 146・ＳＰ 151 により構成される。ＳＤ 126 を切る。遺物はＳＰ 127 から須恵器有台坏（29）が出土している。

３．土坑

ＳＫ 18（第 23 図：図版７）

Ｆ・Ｇ－７グリッドに所在。上端平面プラン形状は不整楕円形である。規模は東西軸 1.2 ｍ、南北軸 0.7 ｍを測る。検出面からの深さは 40 ㎝である。

木製品の刀代（験？）状の木製品（52）が出土した。ＳＢ 169 またはＳＢ 170 の東側に隣接する位置関係になる。周辺遺構との切り合い等は確認されない。

ＳＫ 32（第 17 図：図版 12）

Ｅ－６グリッドに所在。上端平面プラン形状は不整形である。規模は南北軸 0.7 ｍを測る。検出面からの深さは 14 ㎝である。遺物は土師器小片が出土したが図化していない。

ＳＫ 38（第 33 図：図版 18）

Ｇ－ 12 グリッドに所在。上端平面プラン形状は不整方形である。規模は東西軸・南北軸共に約 0.6 ｍを測る。検出面からの深さは 12 ㎝である。遺物は出土していない。

ＳＫ 49（第 27 図）

Ｉ－ 10 グリッドに所在。上端平面プラン形状は不整円形である。規模は東西・南北軸共に 0.6 ｍを測る。遺物は底部に礎板ないしは柱根と判断される木製品（58）が出土した。もともと柱根が残存していた柱穴の上層が攪乱を受けた状態で検出されたものと推定される。

ＳＫ 109（第 29 図：図版 18）

Ｆ－ 16 グリッドに所在。上端平面プラン形状は不整円形を呈し、規模は東西軸 0.7 ｍを測る。検出面からの深さは 14 ㎝である。遺物は木柱（71）・須恵器蓋（39）が出土している。

４．柱穴

上記の掘立柱建物跡を構成するもの以外で、柱穴を構成するに至らなかったものを表２に列挙した。

５．溝跡

ＳＤ 82 （第 12 図）

Ｆ－９～Ｇ－ 10 グリッドに所在。上幅は 35 ㎝、深さは 20 ㎝を測る。平面プランは直線であり、軸線方向はＮ－２°－Ｅを測る。ＳＩ 37 に切られる。遺物は出土していない。

ＳＤ 112（第 15 図）

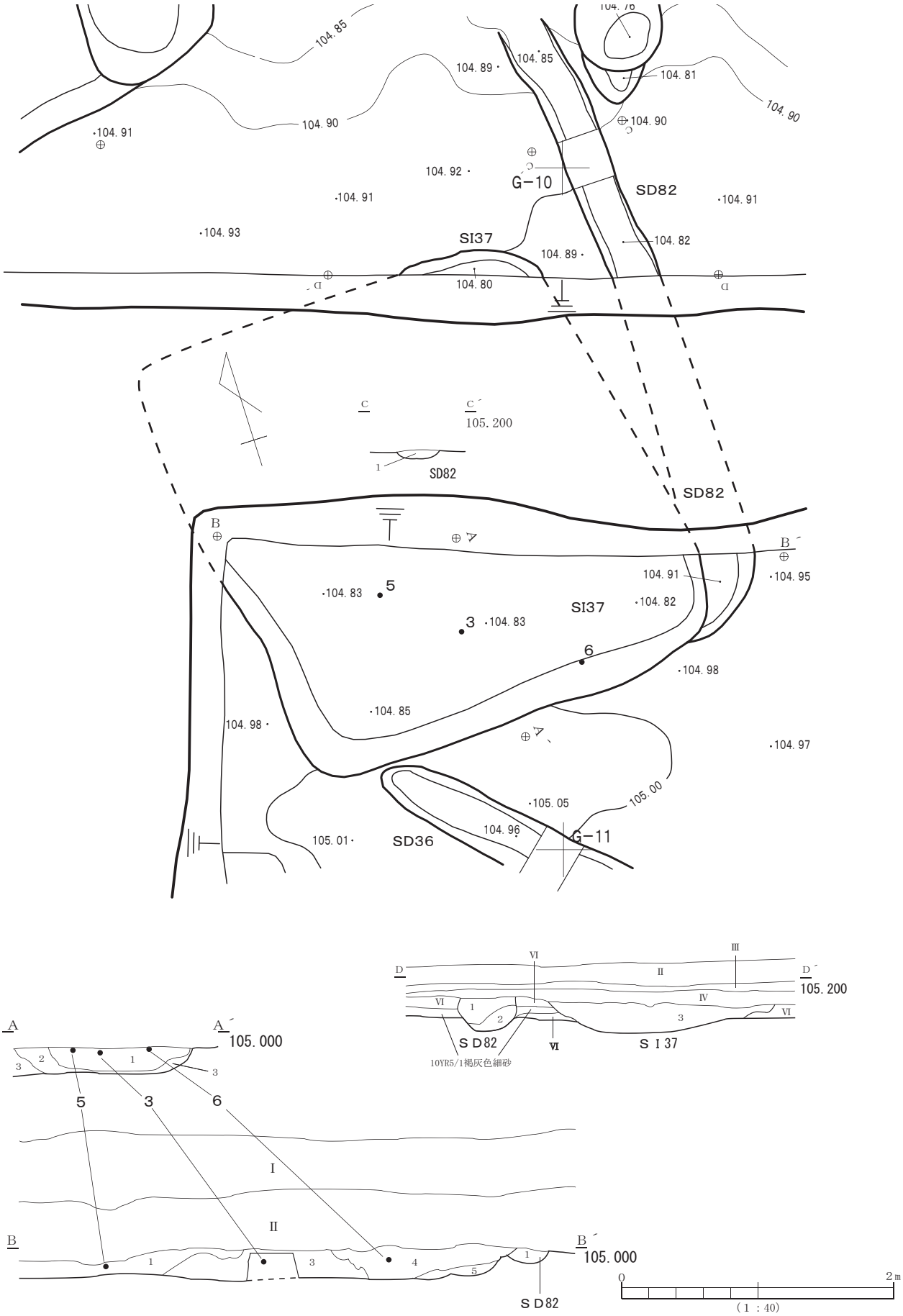
Ｉ－ 17 グリッドに所在。平面プランは直線である。ＳＸ 139 を切る。遺物は出土していない。

ＳＤ 16（第 17 図：図版９）

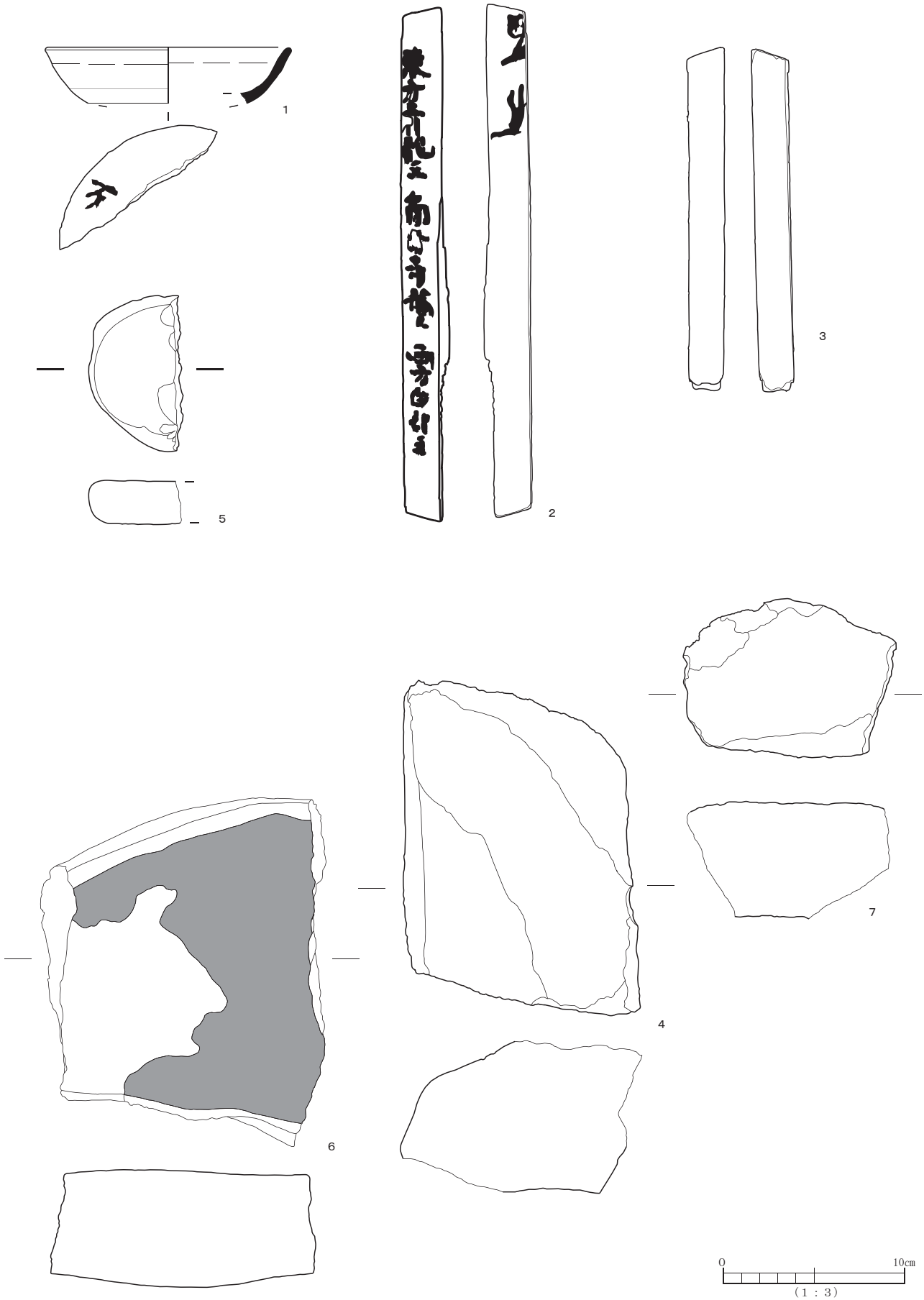
Ｆ－７グリッドに所在。平面プランは直線であり、軸線方向はＮ－ 14°－Ｅを測る。ＳＤ 35 に切られる。遺物は出土していない。

ＳＤ 20（第 17 図：図版９）

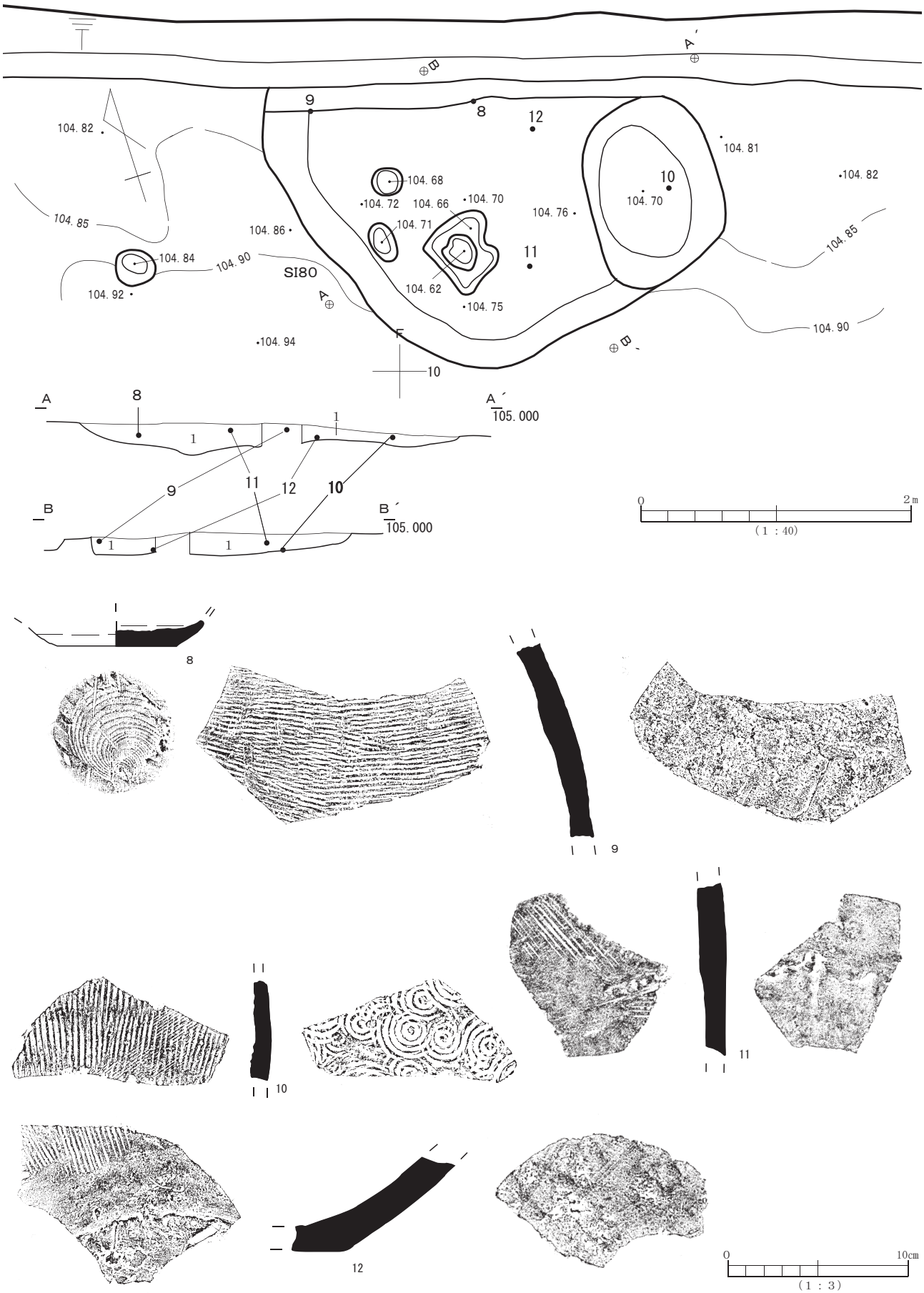
Ｄ－６グリッドに所在。平面プランは直線であり、軸線方向はＮ－７°－Ｅを測る。南側が掘削を受けており判然



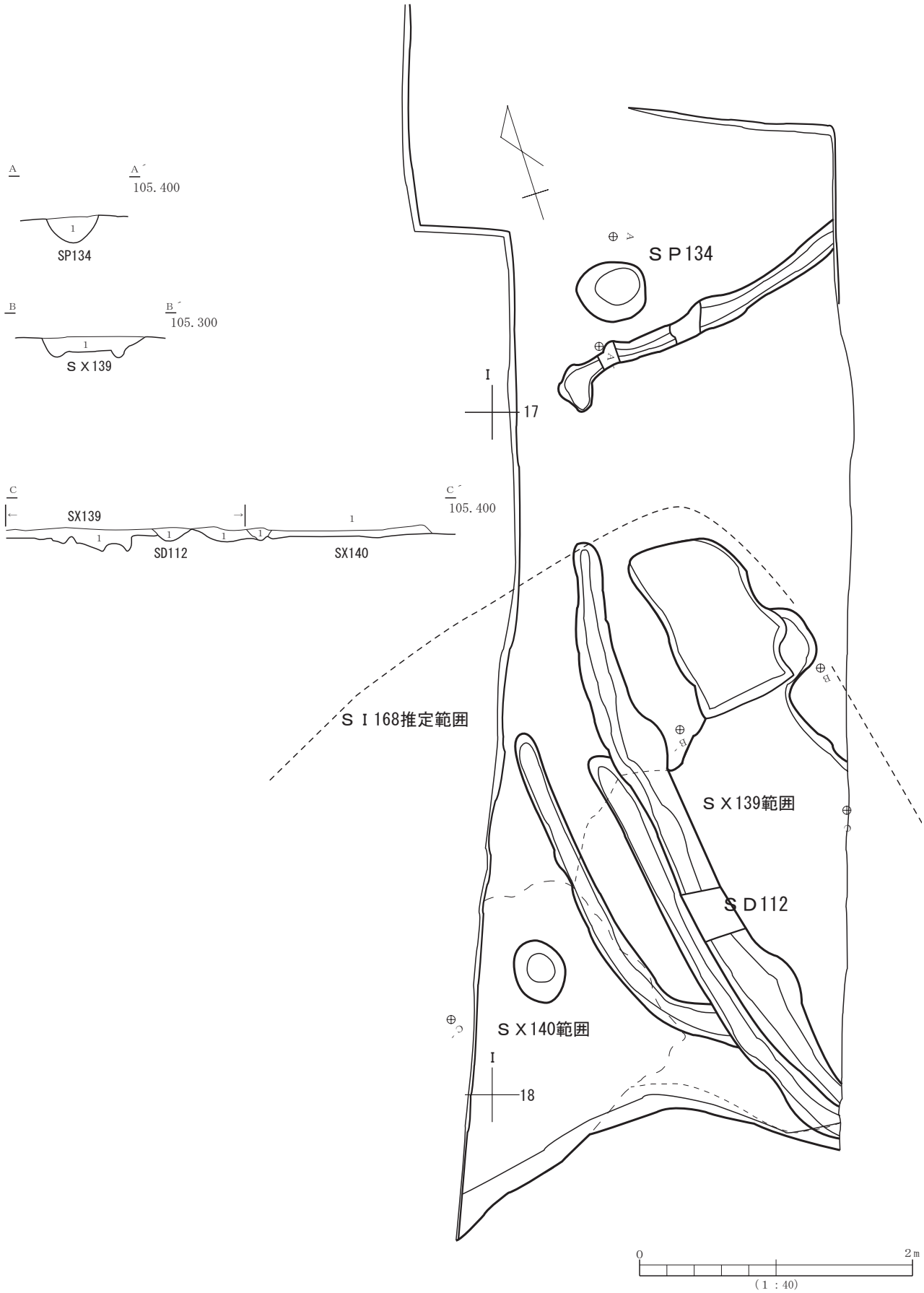
第12図　ＳＩ37　平面図・断面図



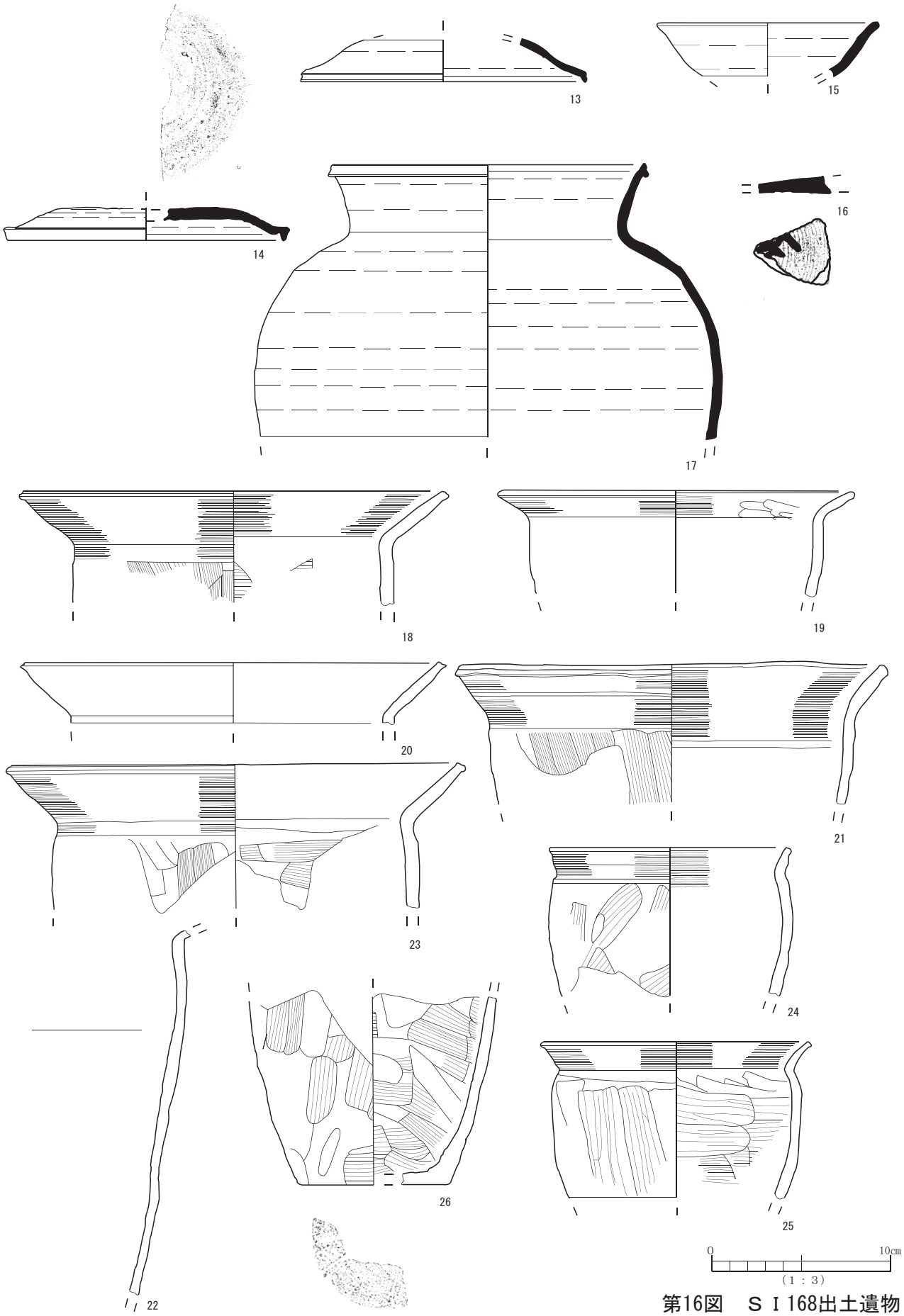
第13図　ＳＩ37　出土遺物



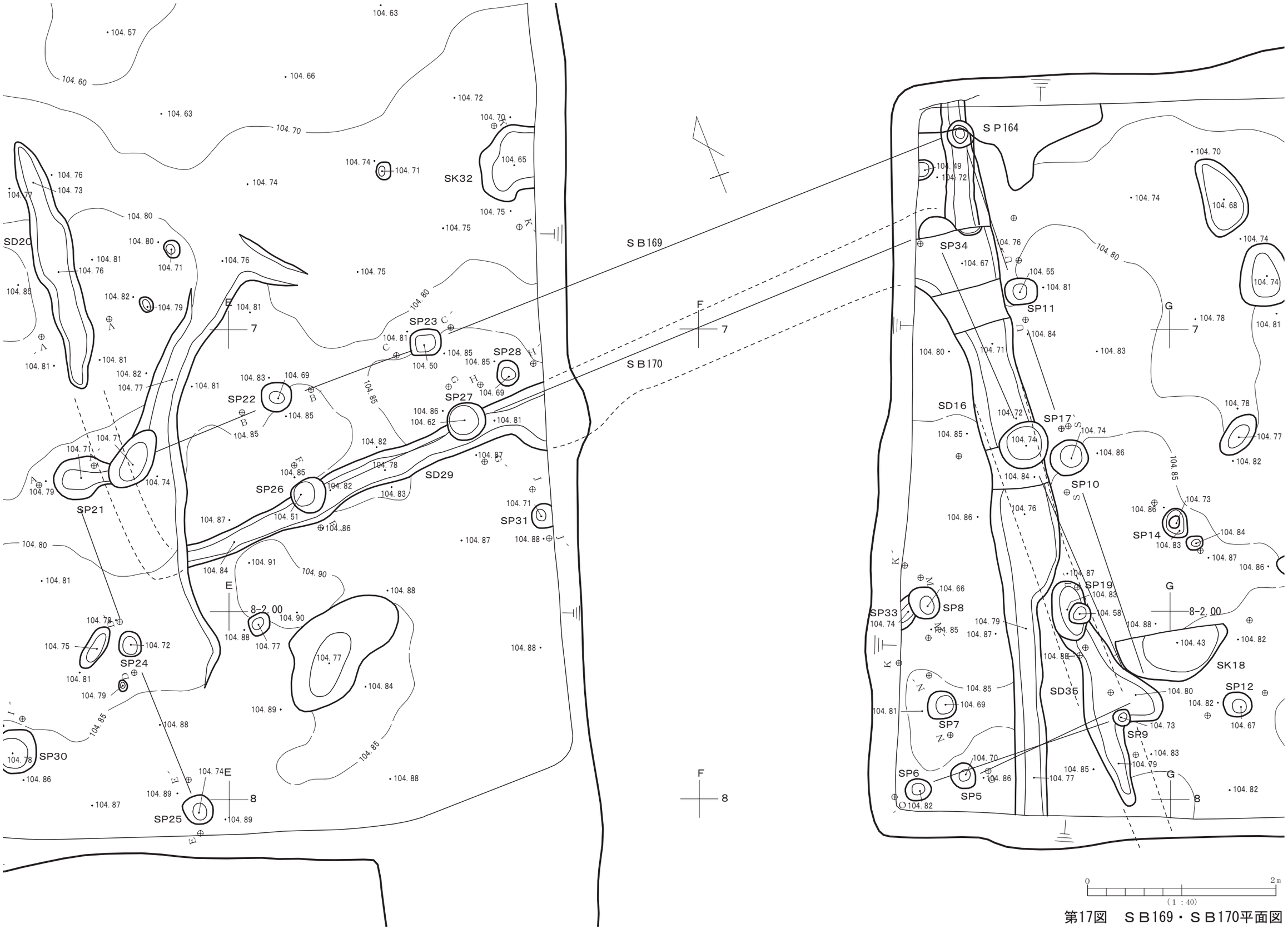
第14図　ＳＩ80　平面図・断面図・出土遺物



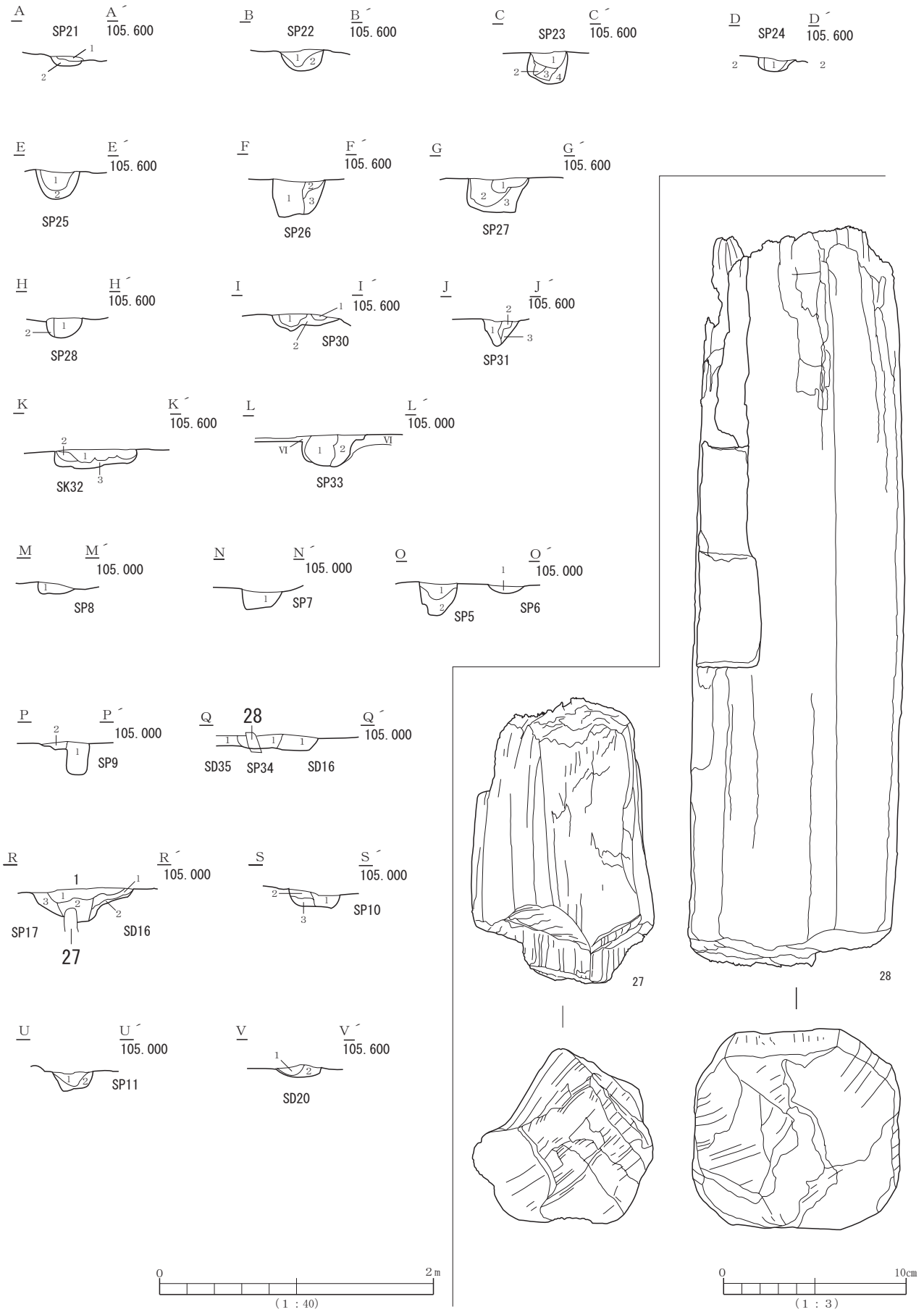
第15図　ＳＩ168　平面図・断面図



第16図　ＳＩ168出土遺物



第17図　ＳＢ169・ＳＢ170平面図



第18図　ＳＢ169・ＳＢ170　ピット群断面図・出土遺物

としないが、直角に折れてＳＤ 29 に繋がる様相が推定される。遺物は出土していない。

ＳＤ 29（第 17 図）

Ｄ･Ｅ－７グリッドに所在。平面プランは直線であり､軸線方向はＮ－ 46°－Ｅを測る。ＳＰ 26･ＳＰ 27 に切られる。遺物は出土していない。

ＳＤ 35（第 17 図：図版 11）

Ｆ－７グリッドに所在。平面プランは直線であり、軸線方向は真北を測る。ＳＤ 16 を切る。掘り込みは浅い。調査区外のため判然としないが、直角に折れてＳＤ 29 と繋がる様相が推定される。遺物は出土していない。

ＳＤ 113（第 19 図：図版 16・17）・ＳＤ 142（第 19 図）

Ｉ－ 18 グリッドに所在。上幅は 35 ㎝を測る。平面プランは蛇行したカーブを描く。ＳＤ 142 と同一遺構。ＳＤ 115 を切る。遺物は多く出土したが、大半が小破片であり、図化できたものはわずかである。Ｉ－ 19 グリッドの覆土上層Ｖｃ層中にて、逆位で突き刺さるように完形の須恵器平瓶（104）が出土した。ＳＤ 113 からは須恵器蓋（34）・坏（33)、有台坏（35）と赤焼土器無台坏（32)、ＳＤ 142 からは須恵器甕（39)、土師器甕底部（40）が出土した。

ＳＤ 114（第 19 図：図版 16・17）

Ｉ－ 18 グリッドに所在。上幅は 25 ㎝を測る。平面プランは緩やかなカーブを描く。ＳＤ 115 に切られる。遺物は出土していない。

ＳＤ 115（第 19 図）・ＳＤ 143（第 19 図）・ＳＤ 145（第 19 図：図版 16・17）

Ｉ－ 18 グリッドに所在。上幅は 35 ㎝を測る。平面プランは緩やかなカーブを描く。ＳＤ 145･ＳＤ 143 と同一遺構。ＳＤ 113 に切られ、ＳＤ 114 を切る。ＳＤ 115 からは赤焼土器坏（36)、ＳＤ 143 からは須恵器無台坏（41)・甕（44）土師器（42・43・46)、ＳＤ 145 からは須恵器壺（47）が出土した。

ＳＤ 126（第 19 図：図版 15）

Ｉ－ 18 グリッドに所在。上幅は 50 ㎝を測り、深さはごく浅い。平面プランは直線であり、軸線方向はＮ－５°－Ｅを測る。ＳＰ 132・ＳＰ 131・ＳＰ 141 に切られる。須恵器蓋（38)・甕（37）が出土した。

ＳＤ 171（第 19 図）

Ｉ－20 グリッドに所在。上幅は 30 ㎝を測る。平面プランは蛇行する。深さは 10 ㎝程度と浅い。遺物は出土していない。

ＳＤ 96（第 24 図：図版 14）

Ｉ－ 14・15 グリッドに所在。上幅は 60 ㎝を測る。深さは５㎝程度と浅い。平面プランは直線であり、軸線方向はＮ－ 88°－Ｗを測る。遺物は出土していない。

ＳＤ 81（第 24 図：図版４・５）

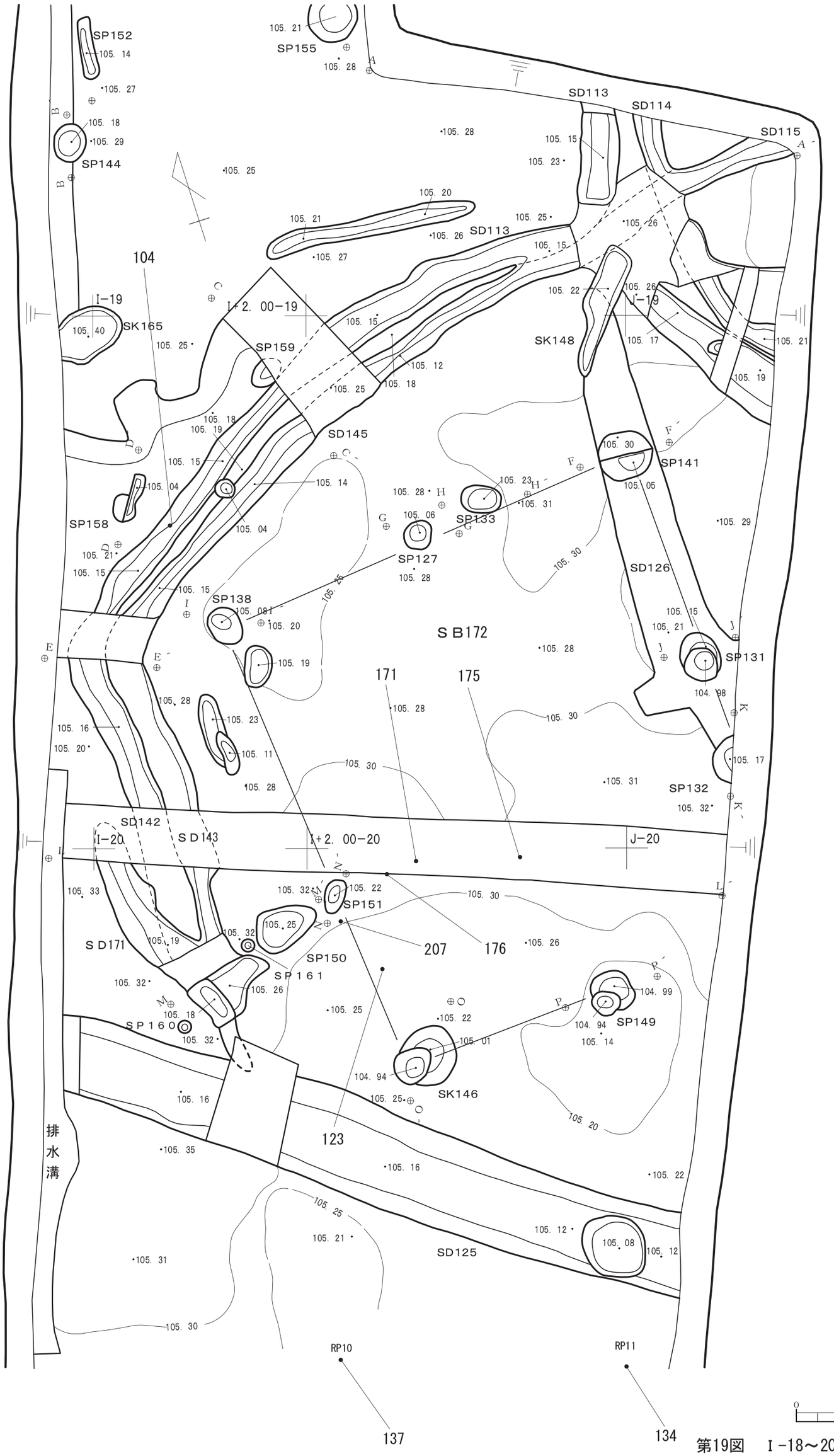
Ｅ－９グリッドに所在。上幅は 50 ㎝を測る。深さは 15 ㎝を測る。平面プランは直線であり、軸線方向はＮ－ 24°－Ｗを測る。ＳＩ 80 西側に位置する。遺物は出土していない。

ＳＤ 123（第 30 図：図版 19）

Ｉ－ 23 ～ 25 グリッドに所在。上幅は 40 ～ 50 ㎝を測る。平面プランは直線であり、軸線方向はＮ－ 24°－Ｗを測り、Ｉ－ 25 グリッドで南西にクランクして曲がる。遺物は出土していない。

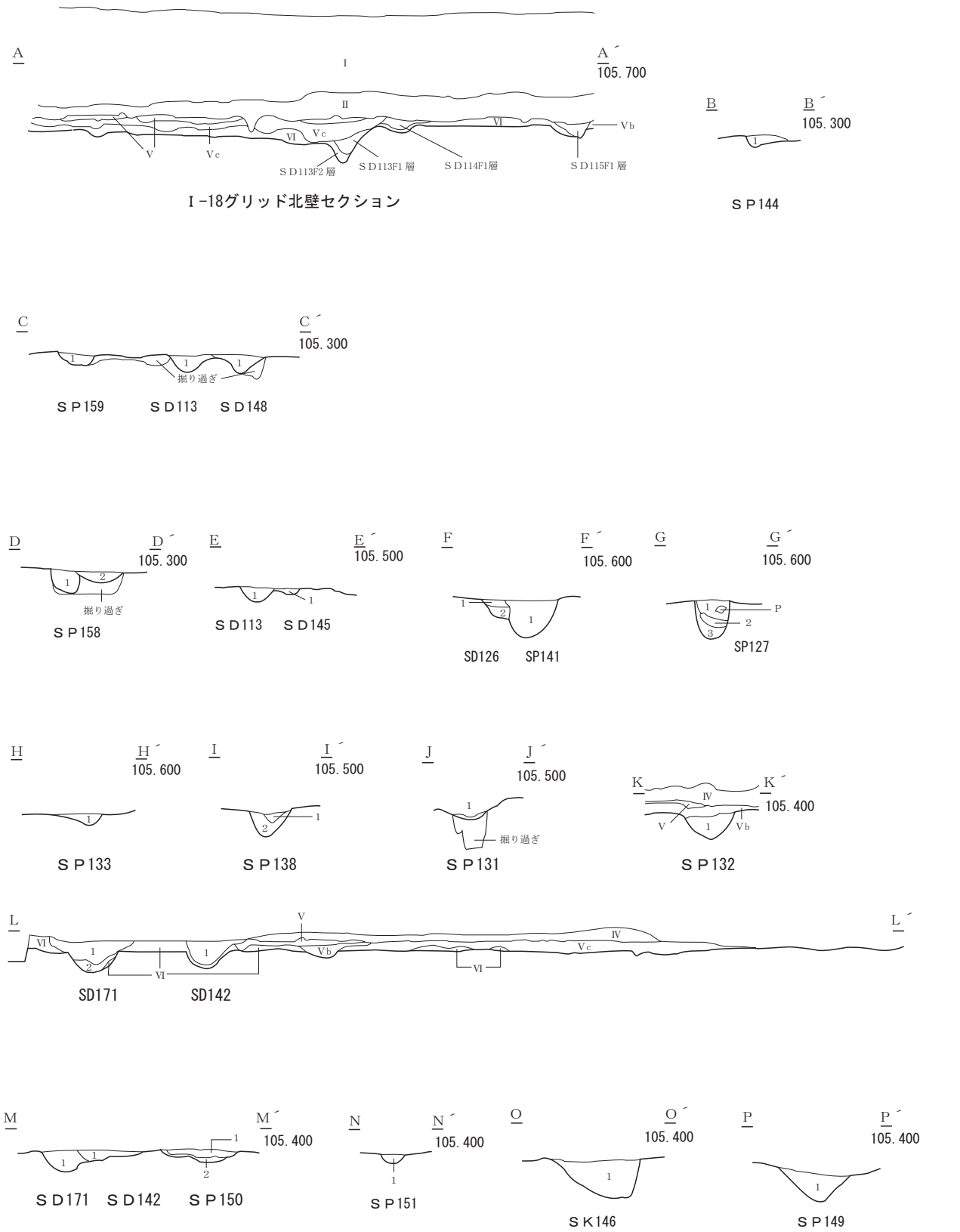
ＳＤ１・ＳＤ 125（第 31 図：図版 15）

Ｆ－ 19 ～Ｈ－ 21 グリッドに所在。上幅は 50 ㎝を測る。深さは 20 ㎝を測る。平面プランは直線であり、軸線方向はＮ－ 52°－Ｗを測る。ＳＤ１・ＳＤ 125 は調査区境界で分断されているが、規模・軸線方向から判断して、同一の溝と考える。西側ではⅥ層上面で確認されたが、東側ではＶｃ層上面で確認されたため、他の遺構群より新しい、Ｖｃ層堆積後の遺構と判断される。ＳＤ１から須恵器甕（63)・壺（62)、ＳＤ 125 から須恵器有台坏（64）甕（65 ～ 69)、土師器甕底部（70）が出土した。

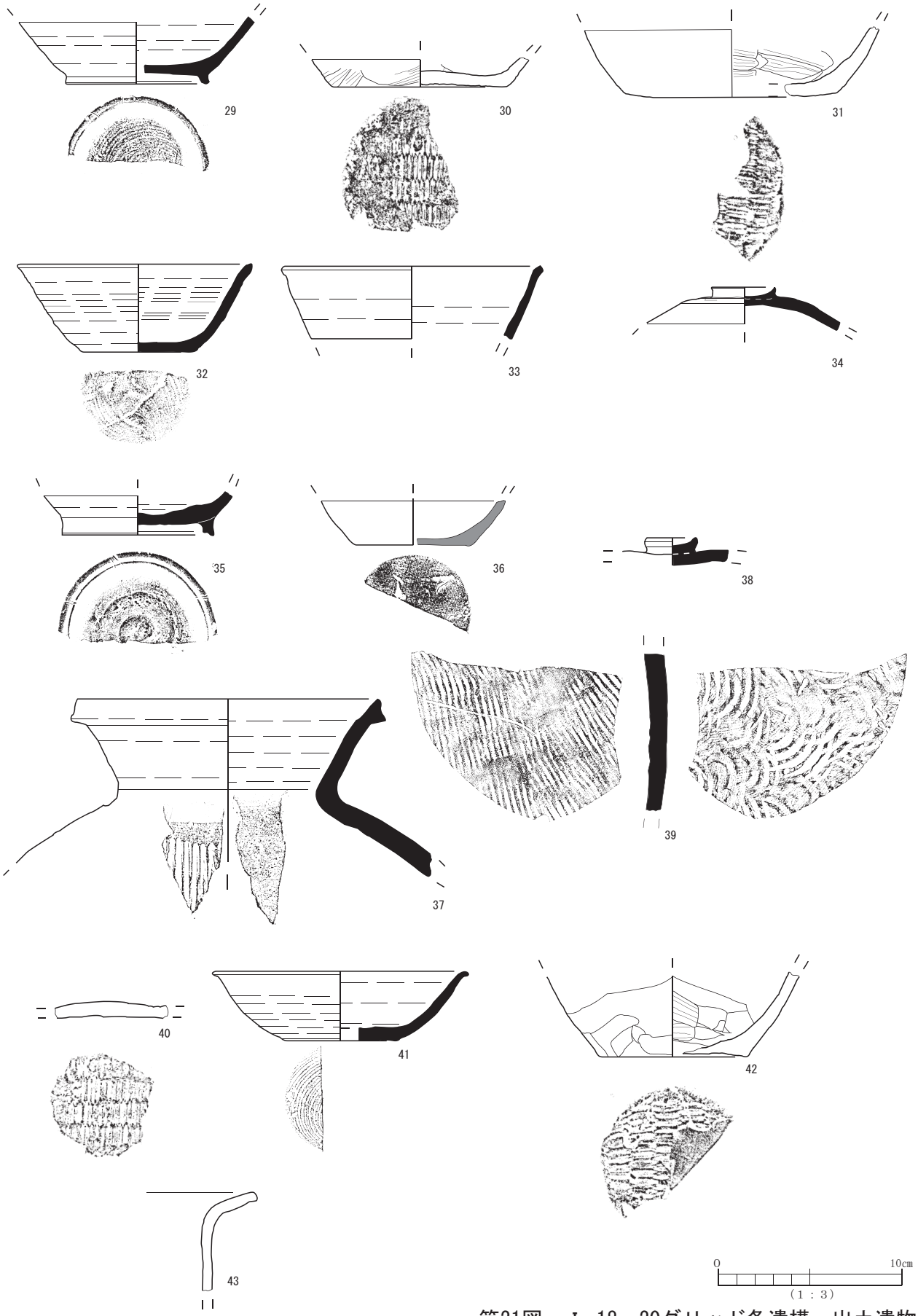


0 2m
(1 : 40)

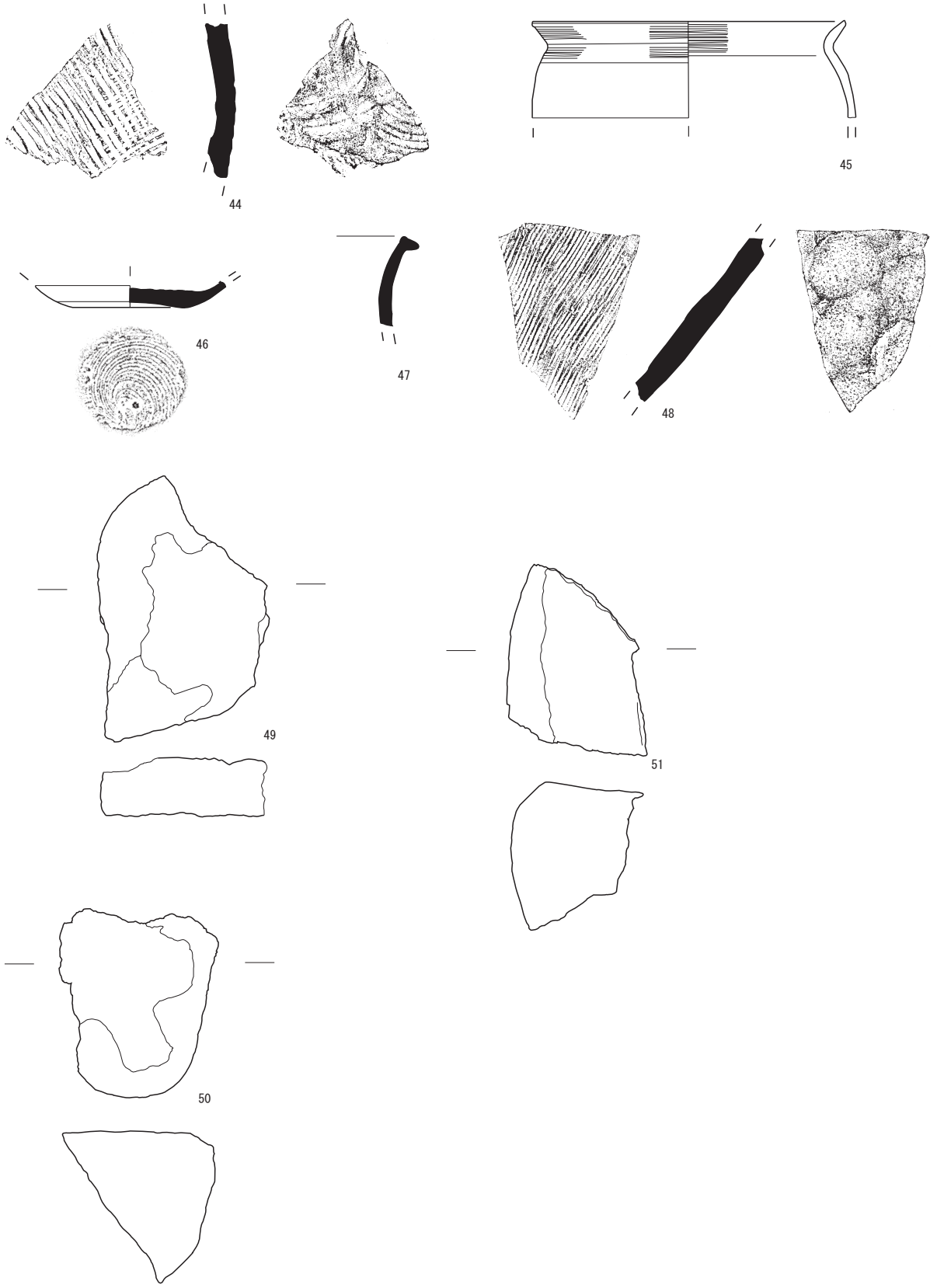
第19図　I-18～20グリッド遺構群　平面図



第20図　Ⅰ-18～20グリッド　各遺構断面図



第21図　Ⅰ-18～20グリッド各遺構　出土遺物



第22図　Ⅰ-18～20グリッド出土遺物（２）・ＳＤ36出土遺物

ＳＤ 36（第 33 図：図版 18）

Ｆ－ 10 ～Ｇ－ 11 グリッドに所在。上幅は 40 ㎝を測る。深さは 10 ㎝を測る。平面プランは直線であり、軸線方向はＮ－ 40°－Ｗを測る。ＳＩ 37 との切り合いはない。ＳＤ 40 と軸線方向を同じくする。南側をＳＧ 41 に切られる。珠洲と判断される須恵器系陶器甕破片（48）・被熱礫（49 ～ 51）が出土した。

ＳＤ 39（第 33 図）

Ｆ－ 12 グリッドに所在。上幅は約 60 ㎝を測る。平面プランは直線であり、軸線方向はＮ－ 9°－Ｗを測る。遺物は出土していない。掘り込みの深さは浅く、不整円形の土坑が重なり合うような凹凸の目立つ底面の状況であった。

ＳＤ 40（第 33 図）

Ｇ－ 12 グリッドに所在。平面プランは直線であり、軸線方向はＮ－ 34°－Ｗを測る。ＳＤ 36 と軸線方向を同じくする。北側をＳＧ 41 に切られる。遺物は出土していない。

６．川跡

ＳＧ 41（第 34 ～ 36 図：図版 18）

調査区の中央部を北西から南東に縦貫する。平成 17 年度調査区（植松 2006）で確認されたＳＸ６と同一の遺構と判断される。Ｖ層と酷似する粘性の強い黒色シルト層の堆積する範囲を河川跡の覆土範囲と認識した。その下層、Ｖｂ層・Ｖｃ層からも遺物が巻き込まれるようにして出土した。Ｆ１層を掘り込む稲杭跡の黄褐色粗砂層をＦ２層として認識した。遺構検出面全体を覆うＶ層自体がＳＧ 41 のＦ１層と酷似し、ＳＧ 41 河川が氾濫して本次調査区全体が覆われたものと考えられる。

Ｆ１層を精査したところ、地山となるⅥ層を小穴状に掘り込んで堆積する様相が確認された。ヨシなどの植物が繁茂し、その根の痕ではないかと推定される。

出土遺物は、Ｆ１層から須恵器蓋（72）・無台坏（73 ～ 79）・有台坏（80）・甕（81 ～ 83）・壺（84）、土師器甕（85 ～ 91）、赤焼土器無台坏（94 ～ 97）、白磁端反碗（98）、砥石（99）、外面にケズリ、内面にミガキを施す土師器坏（100）が出土した。Ｆ２層からは須恵器無台坏（101）のみ出土した。

年代については、遺物の帰属年代から推定して、概ね９世紀前半を中心とし、下限は白磁端反碗（98）や珠洲と判断される須恵器系陶器（154 ～ 156）が、調査区内東側のＧ－ 14 グリッドＶ層からはかわらけ（195・196）が出土しているため、12 世紀後半にはその機能を失い、堆積したものと推定される。須恵器系陶器（60）の出土したＳＤ 36 を切るため、ＳＧ 41 の年代自体が 12 世紀代以降に降る可能性もある。

なお、Ｉ -12 グリッドで検出されたＳＧ 41 底面から、及びＧ -12 グリッドで検出された溝跡ＳＤ 36 の遺構底面（Ⅵ層直上）でパミス状の黄白色堆積物が確認された。サンプルとして採取し、採取箇所はＩ＋ 2.00 － 13 グリッド杭南側及びＨ－ 2.00 － 11 グリッド杭南側である。予算上の制約もあり、分析等は実施していない。

７．遺構外出土の遺物

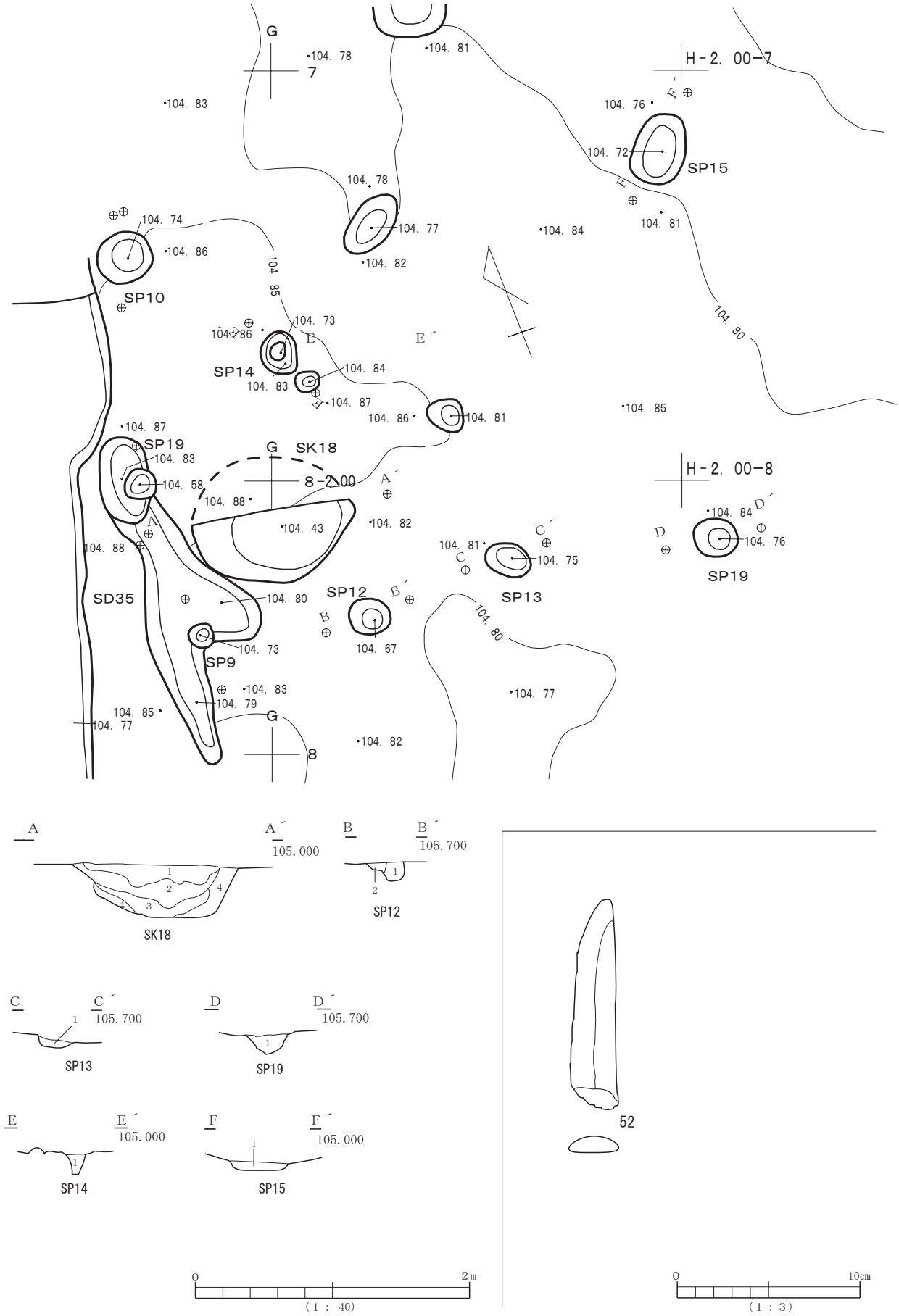
遺構外出土の遺物について第 37 ～ 43 図に列挙した。今回調査区の出土遺物の大半を占める。

遺構検出面直上の包含層であるＶ層から最も多量に遺物が出土した（第 38 ～ 43 図）。

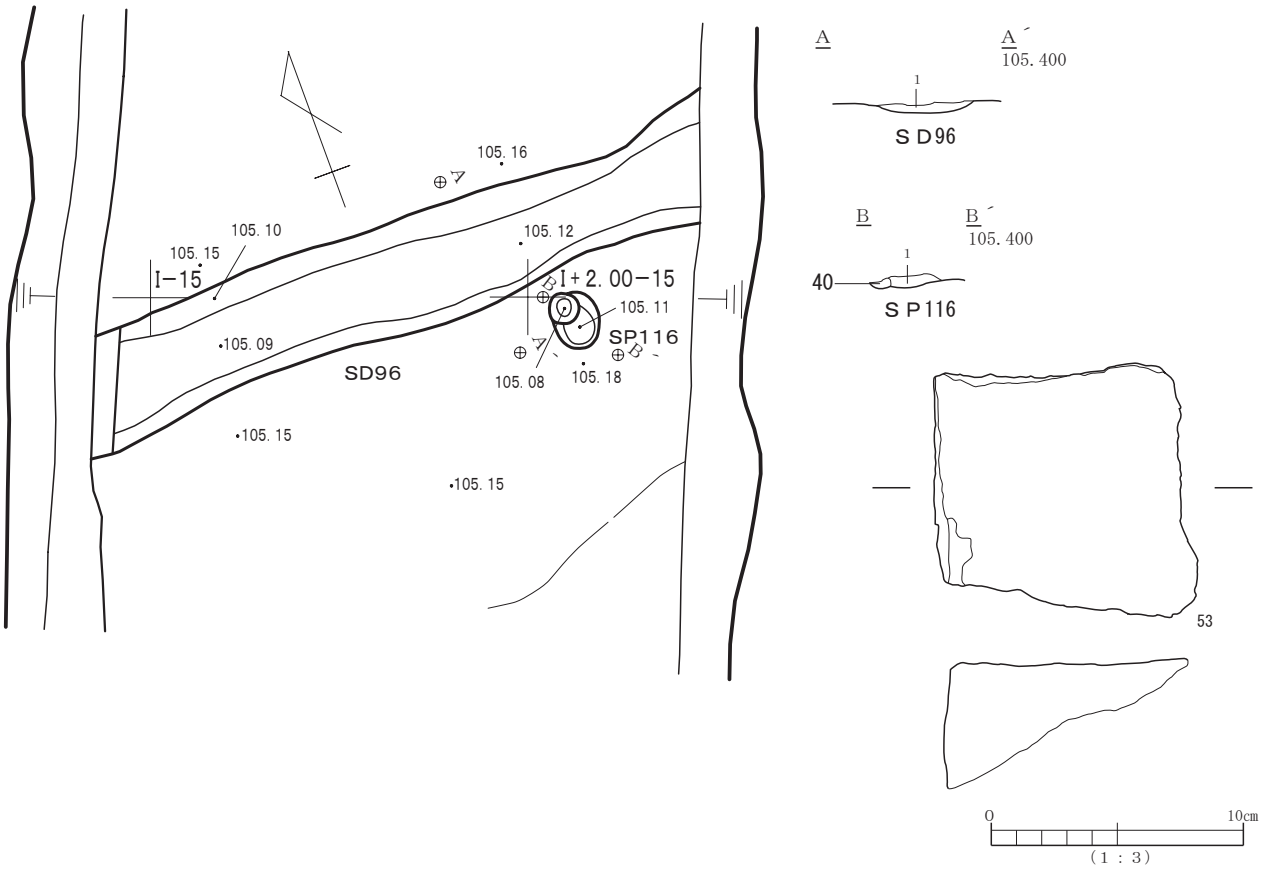
須恵器の無台坏・有台坏・皿・耳付坏（136）・甕・壺、土師器の甕、赤焼土器の無台坏・有台坏、かわらけ、珠洲と考えられる須恵器系陶器甕が出土した。

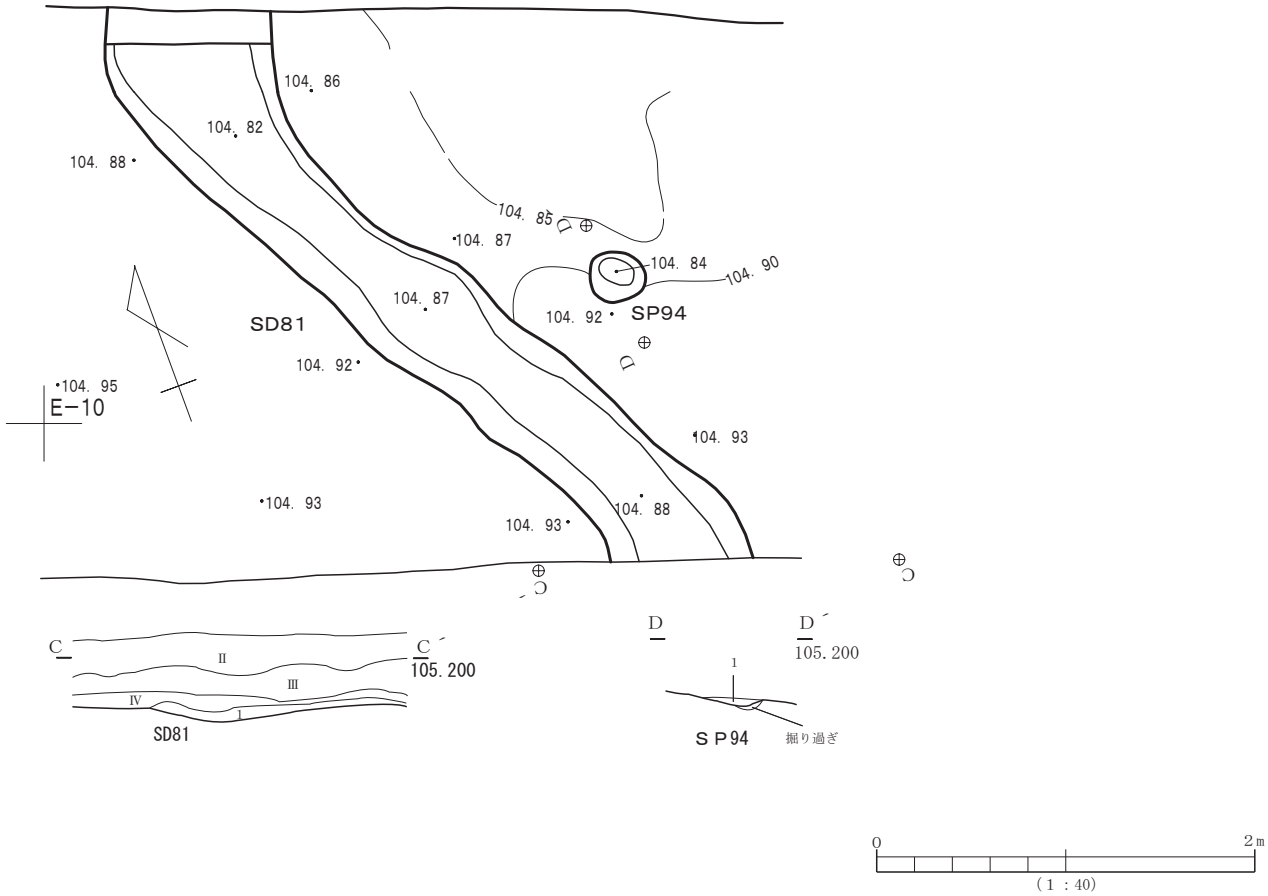
以下、特徴的な遺物について列挙する。Ｉ -19 グリッドのＶｃ層からは、須恵器の平瓶（104）が出土した（第 19 図）。ＳＤ 113 の覆土上層で逆位の状態で検出された。形状等から判断して、坏身底部の切り離しはヘラ削りで、ナデが施されている。注口の口縁部に打ち欠いた痕跡が確認される。

平瓶について、県内からは南陽市蒲生田古墳群・高畠町羽山古墳・酒田市樋ノ口の３例の出土事例があるが、いずれとも形状が異なり、具体的な年代観は不明である。（104）は坏身部分の胎土や法量および底部の調整から推定すると、９世紀初頭の無台坏と形状が類似する。ただし、平瓶そのものの県内出土の類例が少ないため、概要を述べるに留め

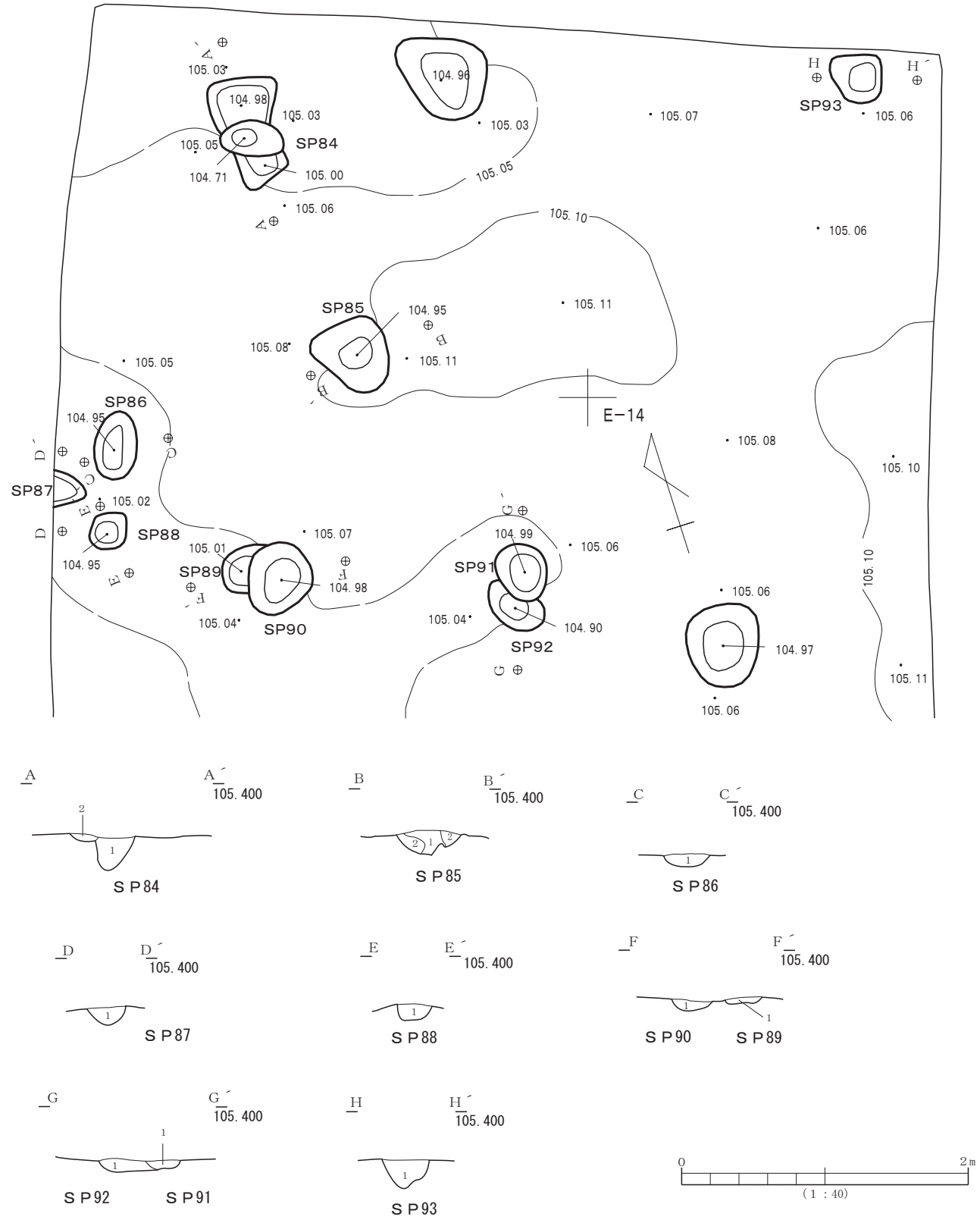


第23図　ＳＫ18・ＳＰ12・ＳＰ13・ＳＰ14・ＳＰ15・ＳＰ19　平面図・断面図・出土遺物

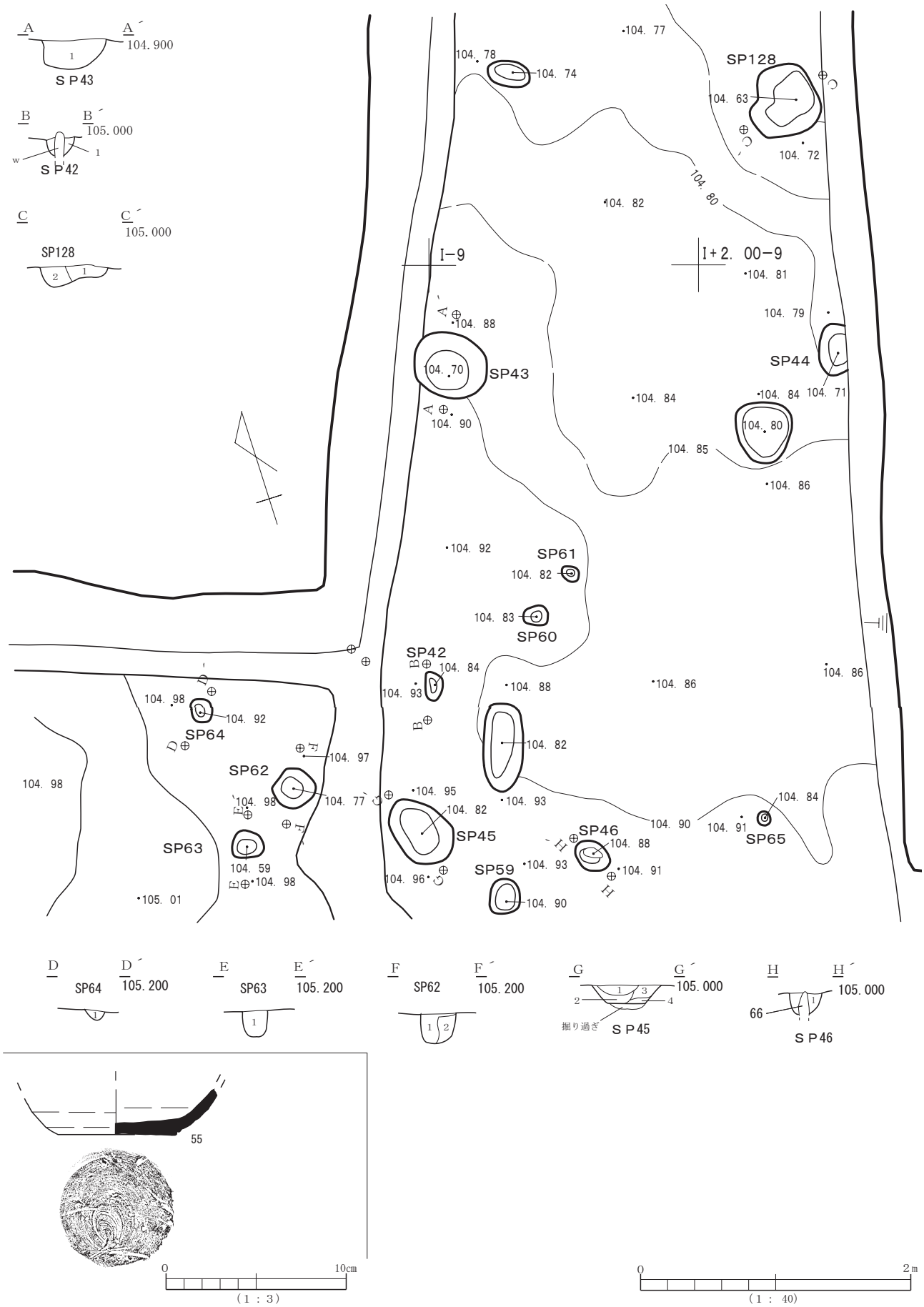




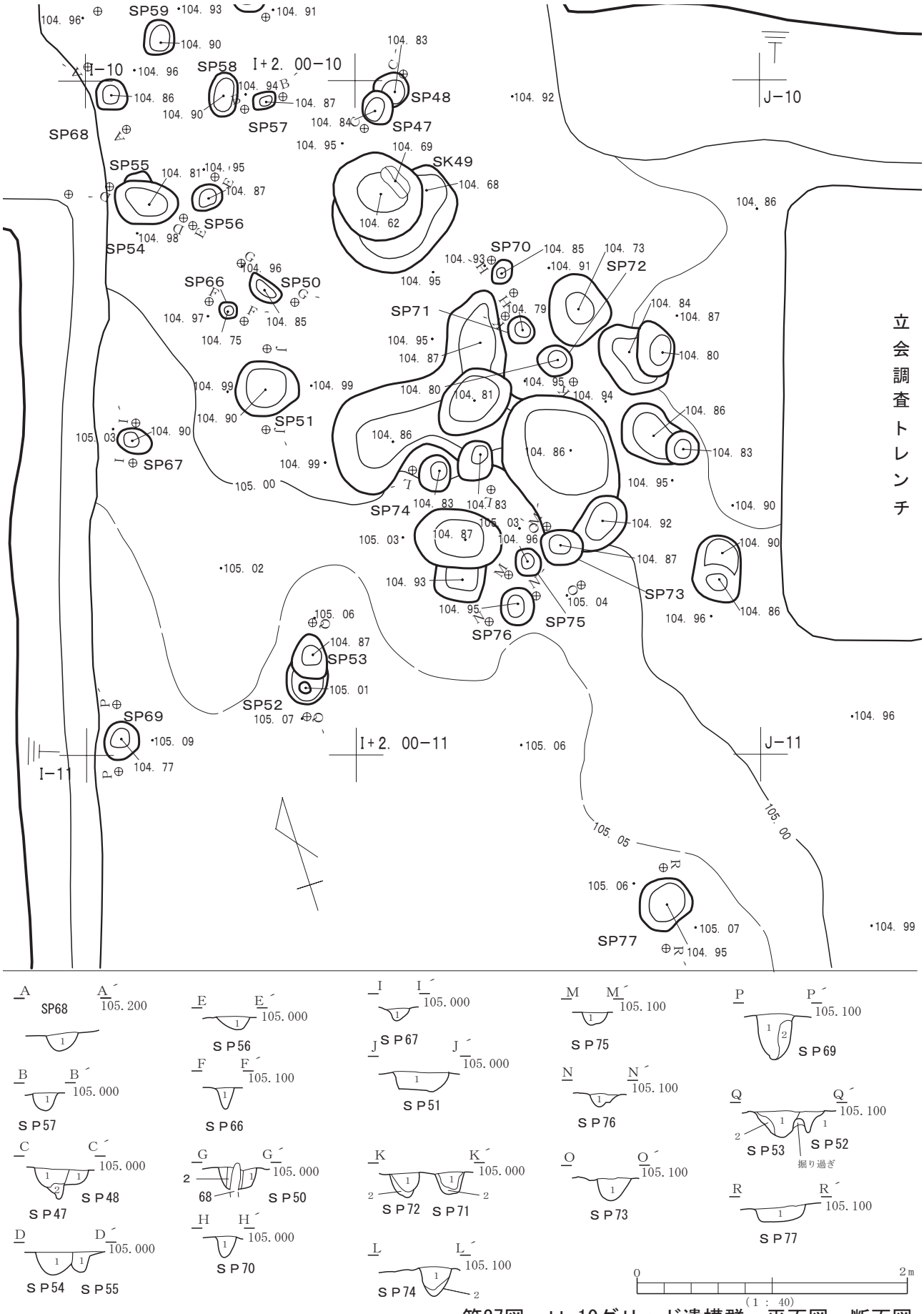
第24図　ＳＰ116・ＳＤ96・ＳＰ94・ＳＤ81　平面図・断面図・出土遺物



第25図　D-13～14グリッド　遺構群　平面図・断面図・出土遺物

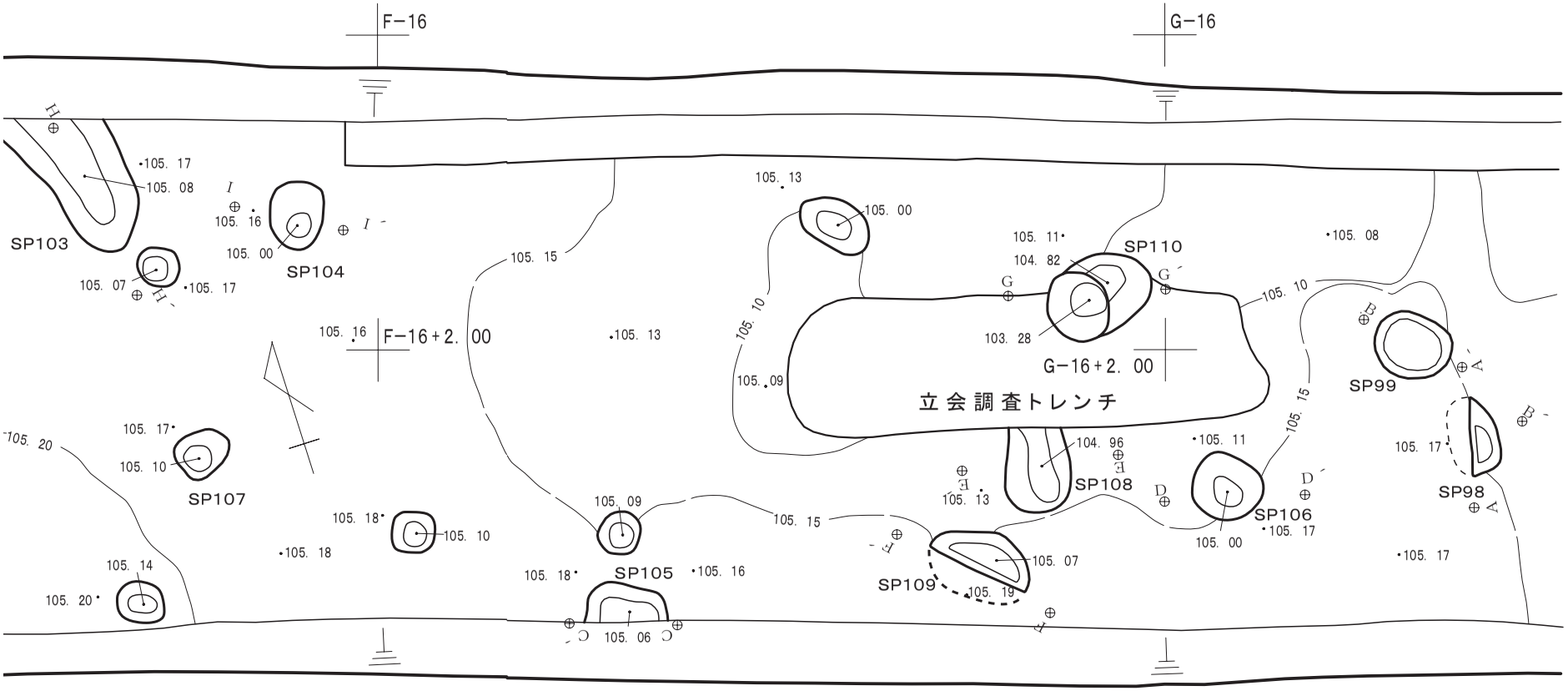


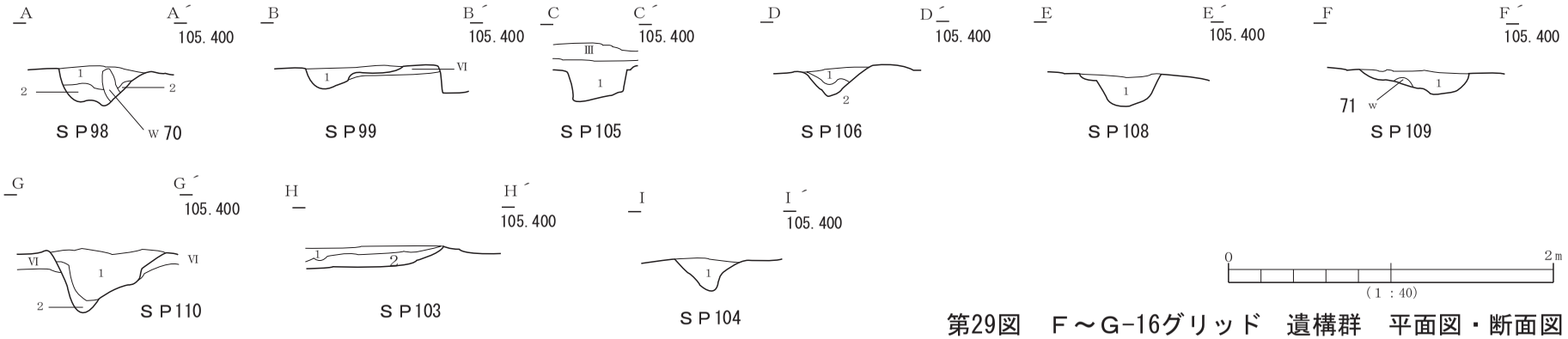
第26図　H～I−9グリッド　ピット群平面図・断面図・出土遺物



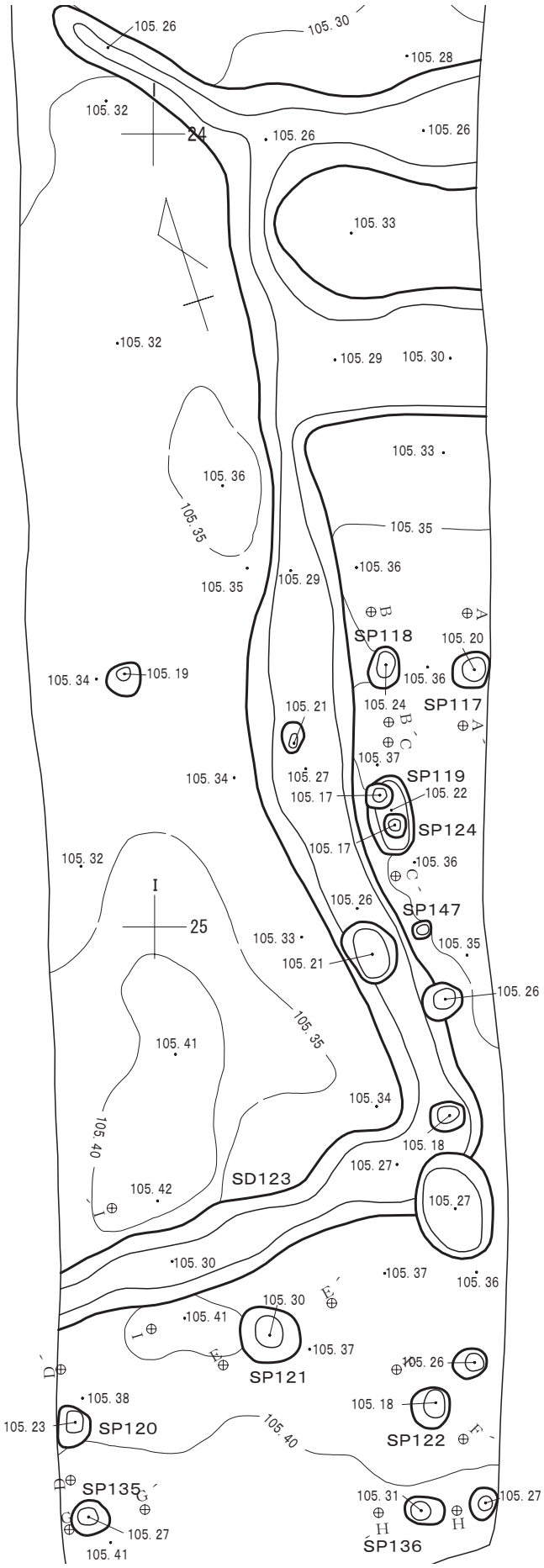
第27図　H-10グリッド遺構群　平面図・断面図

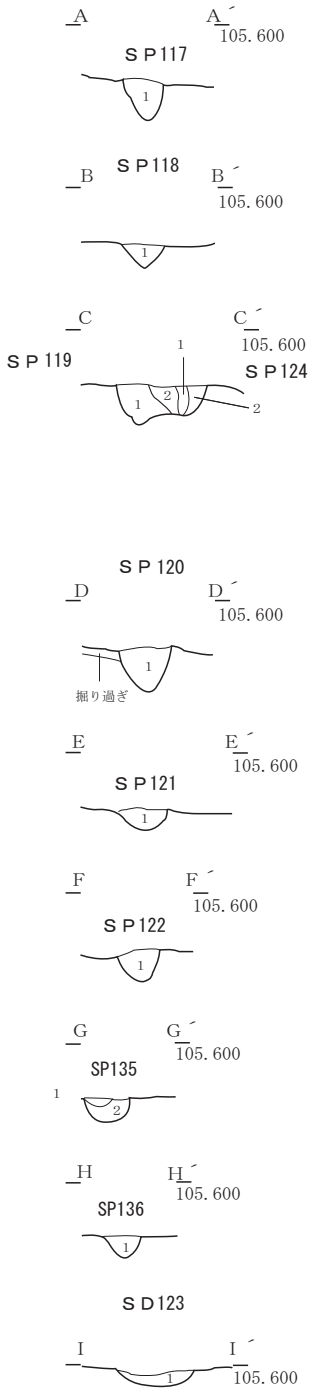
第28図　遺構出土柱根

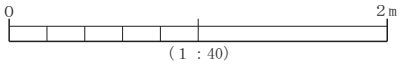




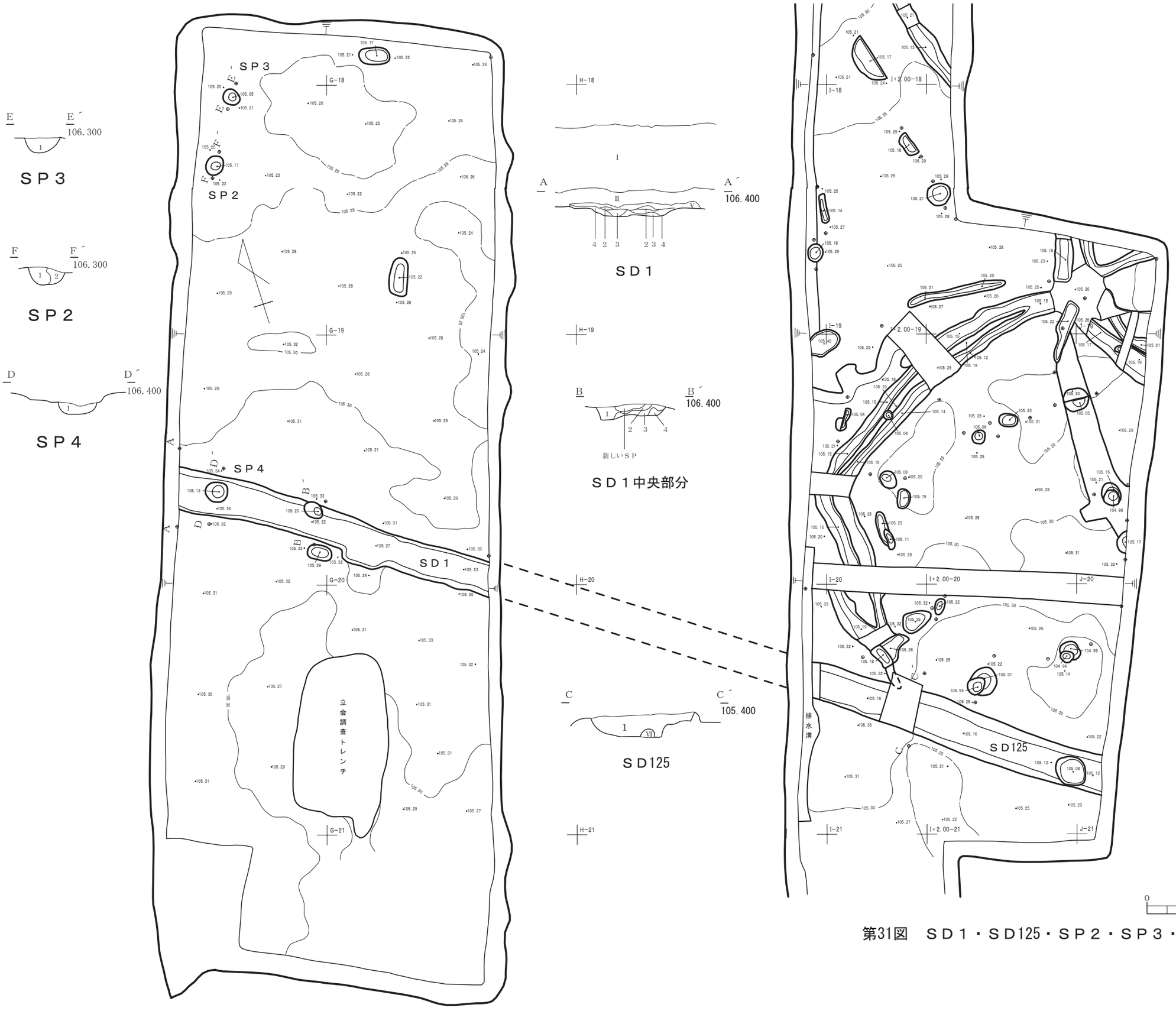
第29図　F～G-16グリッド　遺構群　平面図・断面図





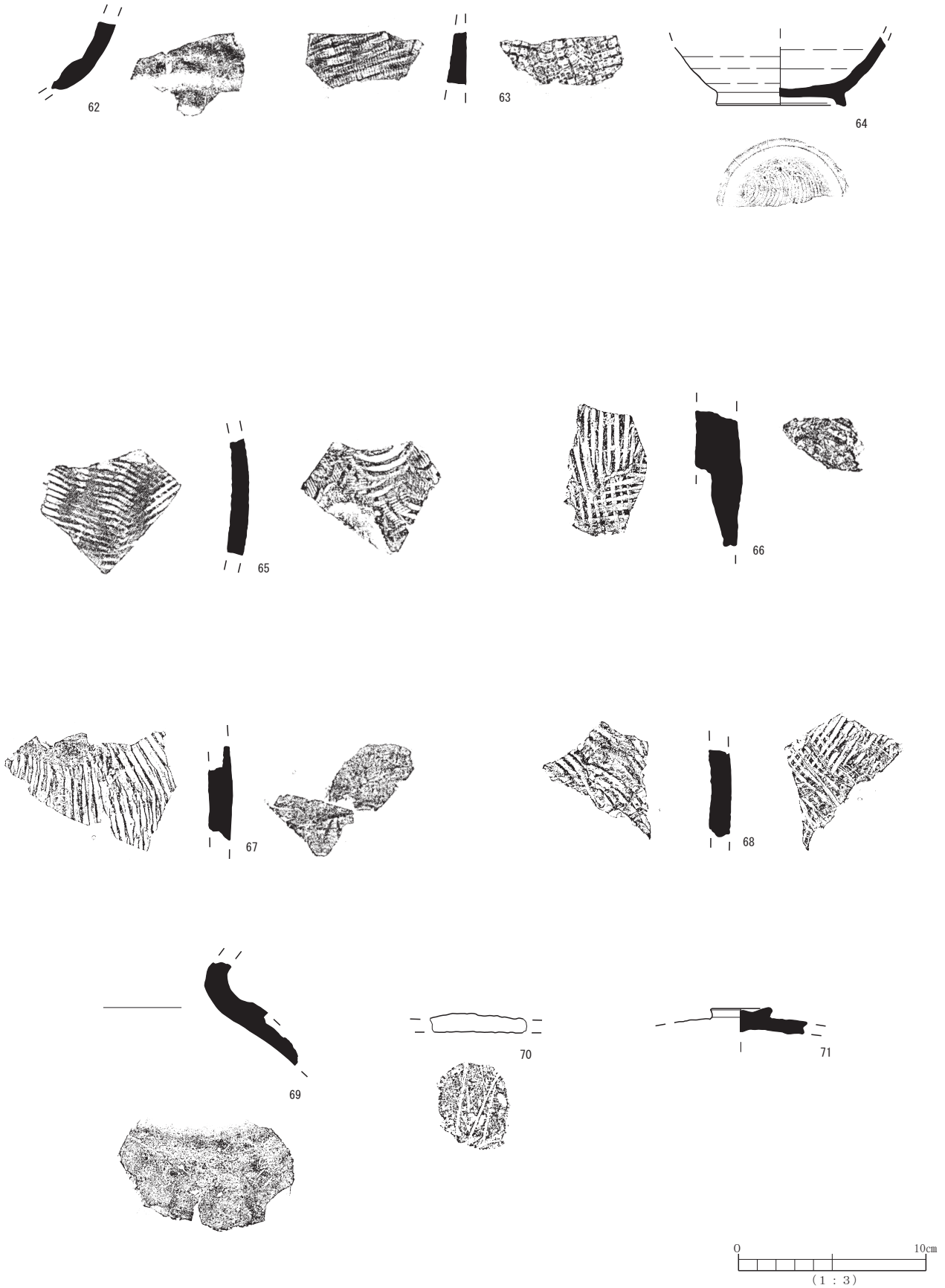


第30図　Ⅰ-22～25グリッド遺構群
平面図・断面図

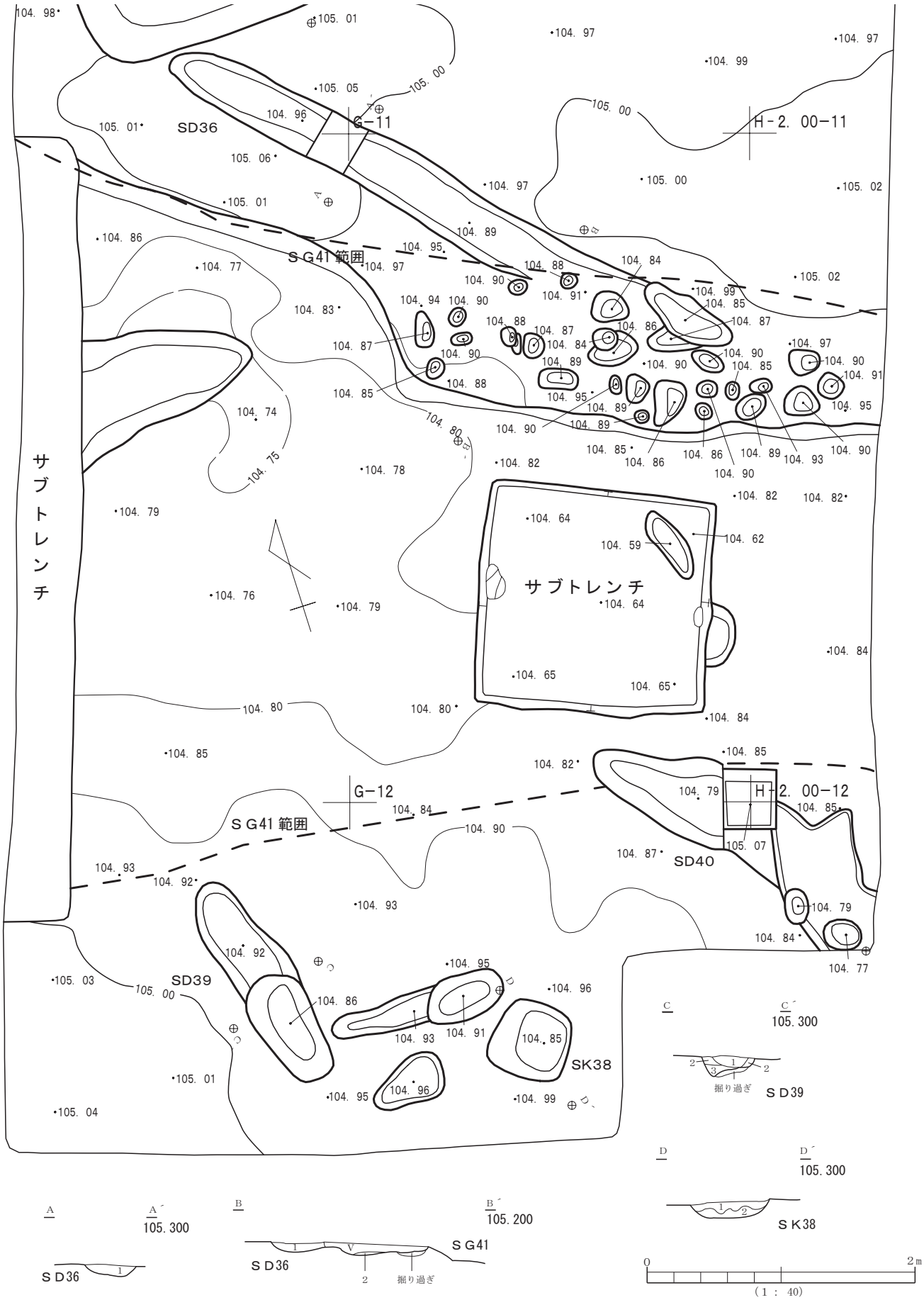


0 4m
(1：80)

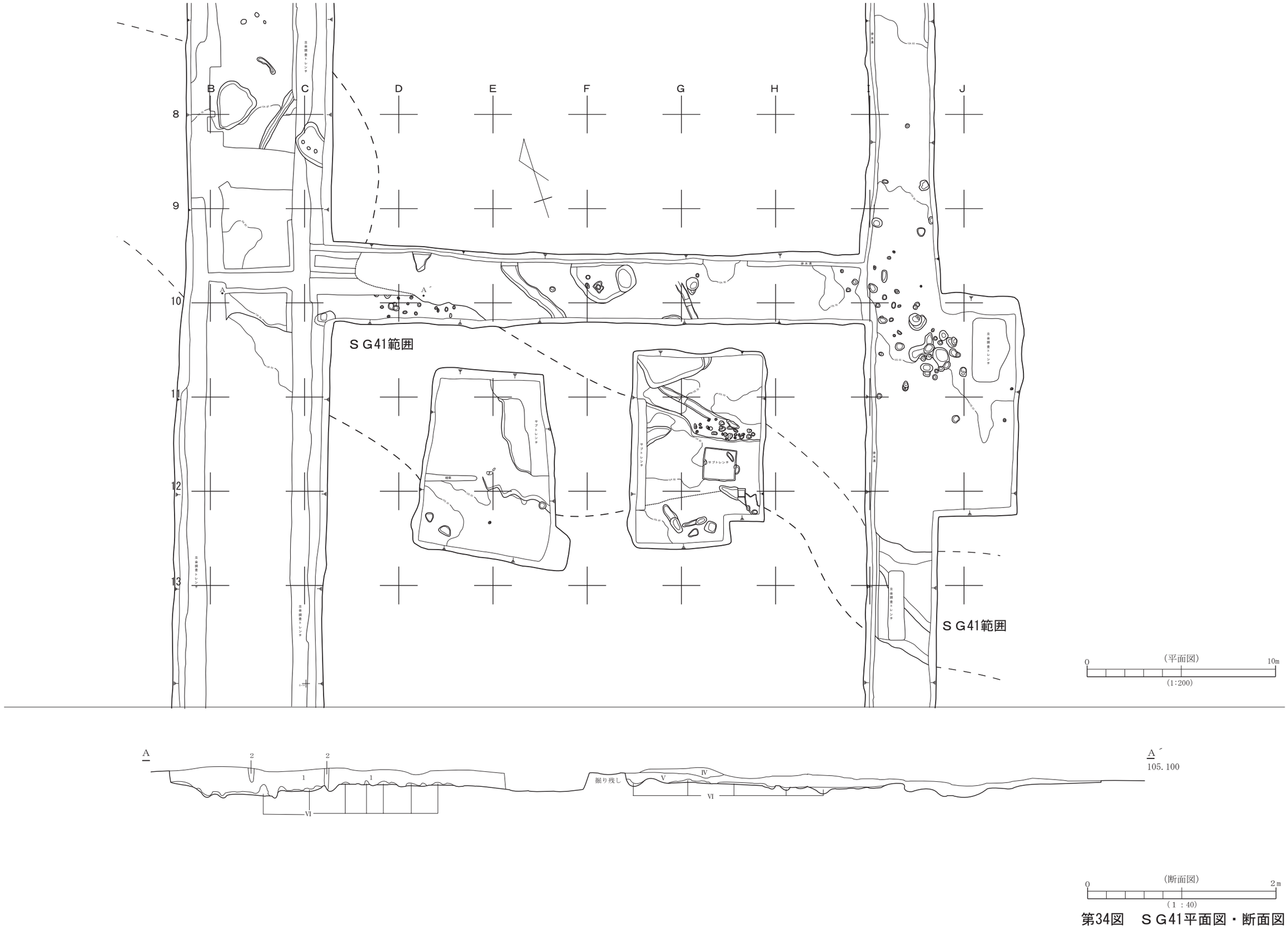
第31図　ＳＤ１・ＳＤ125・ＳＰ２・ＳＰ３・ＳＰ４　平面図・断面図



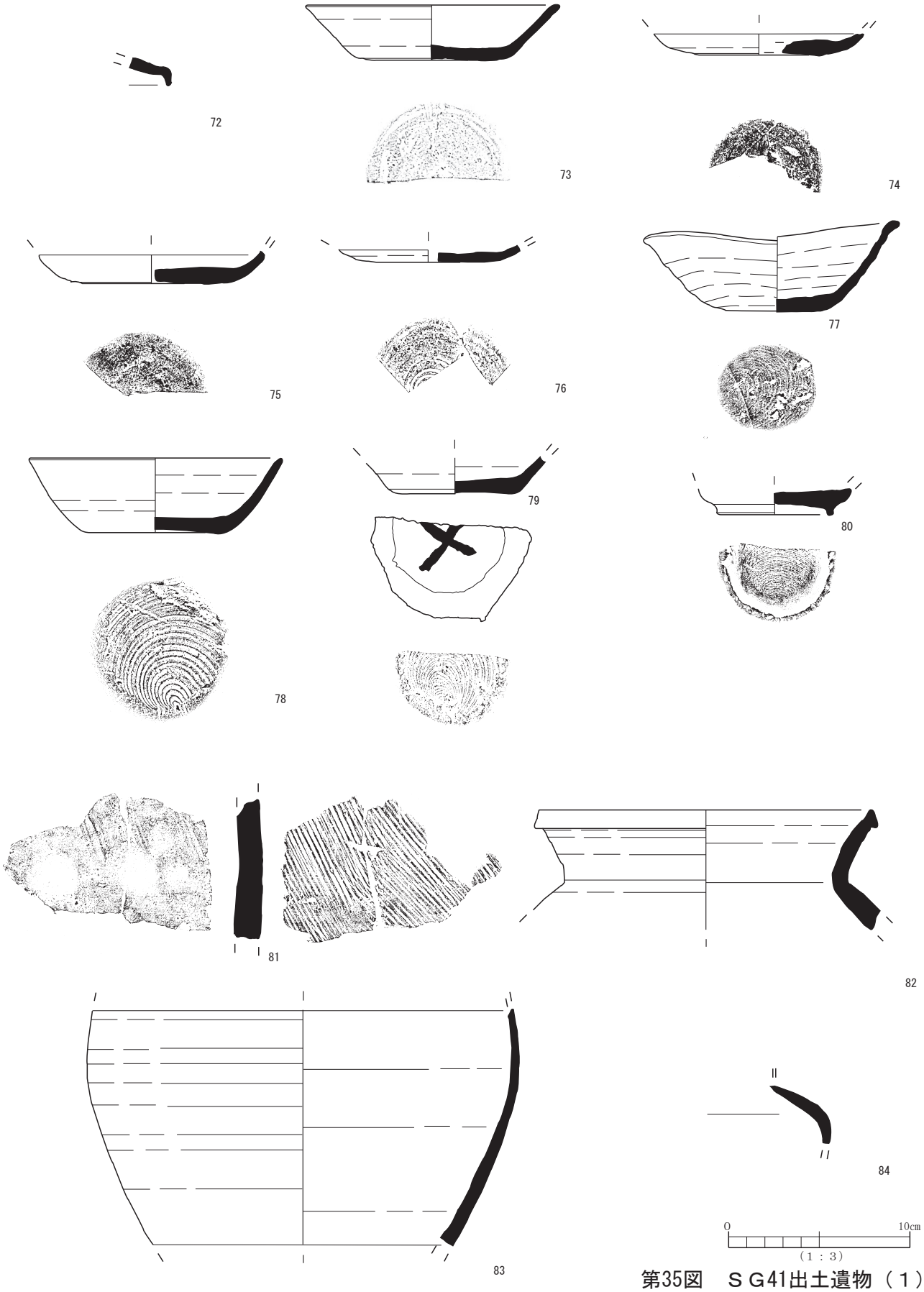
第32図　ＳＤ１・ＳＤ125・ＳＰ109出土遺物



第33図　ＳＫ38・ＳＤ36・ＳＤ39・ＳＤ40　平面図・断面図



第34図　ＳＧ41平面図・断面図



第35図　ＳＧ41出土遺物（１）